

札幌国際芸術祭 2014

事業評価検証会 報告書

別添

別冊資料

目次

0. 札幌国際芸術祭 2014 事業評価検証会報告書 概要	04
0.1. 目的	04
0.2. 札幌国際芸術祭 2014 事業評価検証会	04
0.3. 作業プロセス	04
1. SIAF を検証するための 2 つの評価軸	6
1.1. 文化事業としての評価軸	7
1.1.1. 計画の視点	7
1.1.2. 作り手(企画運営者等)の視点	7
1.1.3. 受け手(来場者等)の視点	7
1.2. 芸術祭としての評価について	8
1.2.1. 芸術祭の歴史の変遷と SIAF	8
1.2.2. 芸術表現形式：「制度内／制度外」における変遷	8
1.2.3. 日本の国際芸術祭の 2 傾向：「国際性／地域性」	8
2. 文化事業としての評価軸	9
2.1. ロジックモデルの構築	9
2.2. 計画の視点	11
2.3. 作り手(企画運営者等)の視点：事業計画意図の実現度について	14
2.4. 受け手(来場者等)の視点	22
2.4.1. SIAF 来場者アンケート集計結果の再分析による検証	22
2.4.2. SIAF2014 の受容について、メディア掲載実績から分析	29
2.4.3. SIAF2014 ドキュメント出版記念イベント来場者(市外のアートファン)へのアンケート調査結果の分析	31
3. 芸術祭としての評価軸	33
3.1. 芸術祭の歴史の変遷と SIAF	33
3.2. 芸術表現形式の「制度内／制度外」における変遷	35
3.3. 日本の国際芸術祭の 2 傾向「国際性／地域性」について	37
4. SIAF2014 事業評価検証会からの提案	40
4.1. 事業評価のための体制作り	40
4.2. 事業評価のための実施段階別調査設計	41
4.3. アンケートの再提案	42
5. SIAF2014 事業評価の統括	43
5.1. 調査の継続の重要性	43
5.1.1. 文化事業における評価のあり方とジレンマ	44
5.1.2. 自然の生態系から学ぶ循環の仕組み	45
5.1.3. 基本方針「都市と自然」の持続可能性のための評価	46
5.2. 本年度の取り組みへの統括	47
5.2.1. ロジックモデルの実践	47
5.2.2. 多様なステークホルダーからの評価	47
5.2.3. ステークホルダーの内面や関係性の可視化	48
5.2.4. 2017 年に向けたロジックの構築準備(提案)	49

はじめに

札幌国際芸術祭(以下、「SIAF」という)は、札幌国際芸術祭基本構想(以下、「基本構想」という)に基づき、2014年に「都市と自然」をテーマに開催された。近年、全国各地で芸術祭やアートプロジェクト等が実施されているが、その背景にはアートによる地域振興を目的の一つとして掲げ、アートが地域コミュニティへ新しい価値をもたらすものとして期待されていることがあげられる。こうした事業が集客等を目的とする一過性の文化イベントという性質を超え、地域コミュニティに浸透し、市民社会へ良い影響を及ぼすためには、長期的な事業継続が必要となる。文化事業は市民の創造性や心の豊かさに寄与し、市民生活の豊かさを生むものではあるが、目に見えての効果が感じられるには複数の段階を経る必要があり、忍耐強く事業の価値を見出し、構築すべきである。

一方で、芸術祭やアートプロジェクトを振り返る際、そこには既存の評価基準や公式があるわけではない。これまで用いられてきた手法と言え、主に短期的な経済効果や観客動員数のカウントくらいである。数値的なデータはある程度の指標にはなるものの、長期的な視点での調査や評価が必要な文化事業に対し、いまだ具体的な方法論が定まっておらず、全国的に見ても十分な検証評価がなされているとは言い難い。こうした状況を鑑み、SIAFの実施主体である創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会(以下、「実行委員会」という)は、外部有識者らによる札幌国際芸術祭2014事業評価検証会(以下、「検証会」という)にSIAF事業を適正に評価する検証作業を依頼した。検証会は適正に事業を運営するため評価基準を検討し、事業評価の仮説検証のためのロジックモデル(論理構造)を構築、文化事業を評価するためのステップを提示した。こうしたロジックモデルを用いた文化事業の中長期的な評価検証は、欧米では実践例が多いが、日本では先例が少ない。そのため、この試みの取り組みを決めた実行委員会の決断、また行われた検証会の活動は一つの先行事例である。

検証会は今回の事業評価を実施するにあたり、札幌市内の関係者に丁寧なヒアリング及びアンケートによる事業実施後の追跡調査を実施した。この内容に関しては別冊資料にまとめた。ここでは関係者の主体的な意見が多く蓄積されたため、今後の事業実践に大いに役立てられることを期待する。

今回の調査にあたり、実行委員会国際芸術祭事務局(以下、「実行委員会事務局」という)、札幌市内関係者等から多大なご協力を得たことに、謝意を表明する。

0.1. 札幌国際芸術祭2014事業評価検証会報告書 概要

0.1. 目的

本報告書は、2015年3月に実行委員会から委託を受け、検証会が、SIAF2014を振り返り、事業評価を実施した成果をまとめたものである。具体的には以下の3点を検証した。

- ① 2012年6月に策定した基本構想に掲げている開催目的や期待される効果に対して SIAF2014 はどこまで達成しているか。
- ② 国内の数ある芸術祭の中での SIAF の位置づけや客観的にどのような評価を得ているか。
- ③ 今後の事業の方向性や重点化すべき点等 SIAF の今後の可能性について。また、今回実施した内容は、次回開催に向けての基礎資料として使われることを目的としている。

0.2. 札幌国際芸術祭2014事業評価検証会

[全体監修/調査設計]

光岡寿郎(東京経済大学コミュニケーション学部専任講師)

大澤寅雄(ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室/文化生態観察)

吉澤弥生(共立女子大学文芸学部准教授)

[コーディネート/執筆/データ分析作業]

熊谷薫(デジタルアーカイブ・コーディネーター/アートマネージャー)

永井希依彦(デロイトトーマツコンサルティング合同会社 シニアアナリスト)

アシスタント:海老澤彩(リサーチャー)

及び、SIAF関係者の追跡調査チーム

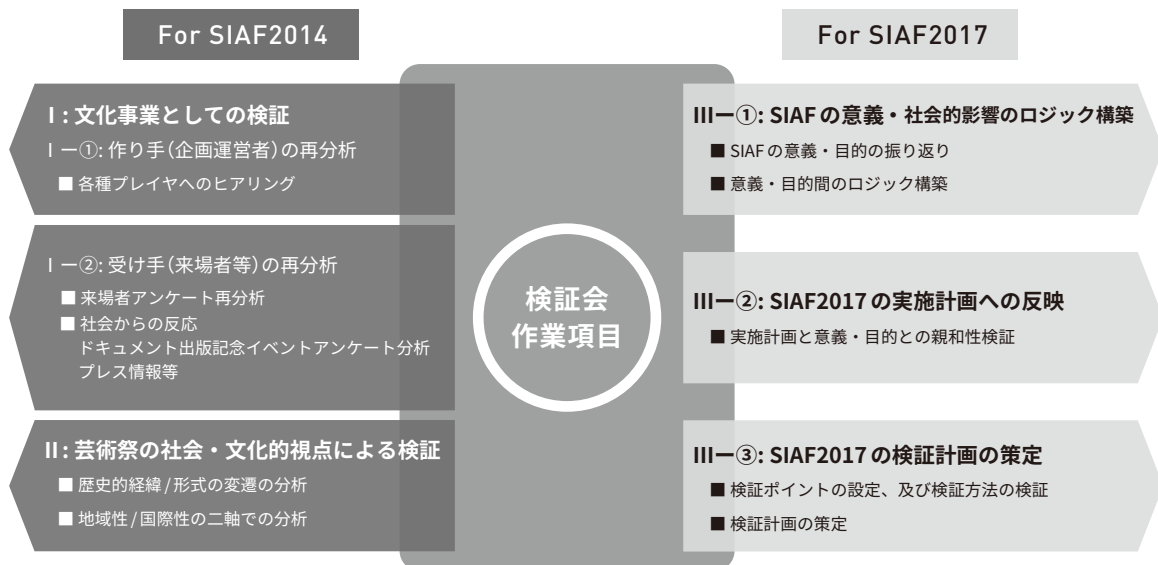
0.3. 事業評価検証会 作業プロセス

- (1) 検証会は実行委員会事務局及びアートマネジメントチームにヒアリングを実施。
- (2) 芸術祭開催時に基本構想をどのように解釈し、何を目標としていたか、芸術祭の価値をどこに見出していたかといった自己評価における目標実現度を検証会メンバーが加わったディスカッションを実施し、確認。
- (3) 検証会はその情報を「文化事業」と「芸術祭」の2つの評価軸で、それぞれに3つの視点を導入した計6つの視点による検証を行うこととした。
- (4) ヒアリング、ディスカッションの2段階で分析した基本構想から、今回の事業評価の基礎となるロジックモデルを構築。
- (5) ロジックモデルから、事業が達成目標に到達するためのステップを明確化。
- (6) 「文化事業」の評価軸で検証を行うための客観データは、会期中に実行委員会が行った調査結果より抽出、及び検証会による新たな調査を実施して生成することとした。
*対象の客観データは、期間中に会場で実施された『来場者アンケート』の再分析、『札幌市内 SIAF 関係者の追跡調査』結果、『市外の観客の意識調査』結果、『振り返りイベントの記録』等である。
- (7) 「芸術祭」の評価軸では、歴史的経緯の提示から今日的傾向や開催意義を導き、他芸術祭との比較のためのモデル図の作成をした上で検証を試みた。

図表 0 検証会実施内容概要

事業評価長期計画

検証会のアウトプットのオーバービュー



図表 0.1 検証会作業スケジュール

	①評価の意義・ 芸術祭の目的の確認	②SIAFの評価 ニーズのヒアリング	③SIAFの意義・ 目的及び特徴の確認	④最終報告への作業・ スケジュールの確認	⑤中間報告
日付	3月16日	3月18日	4月17日	5月26日	7月5日
場所	オンライン会議	札幌	札幌	オンライン会議	札幌
主要 アジェンダ	<ul style="list-style-type: none"> ・芸術祭評価の一般的意識をオーバービューで確認 ・芸術祭評価に係るハイレベルステップの確認 ・前回芸術祭評価の振り返り ・今回芸術祭の「公式」目的の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・SIAFの事業の評価ポイントのヒアリング ・基本構想のブレイクダウン ・各プロジェクトに期待していた点の整理 	<ul style="list-style-type: none"> ・SIAFの差別化ポイント、意義・目的、社会的影響のロジックを議論 ・芸術界評価を通して説明責任を果たす主体を具体的に想定 	<ul style="list-style-type: none"> ・SIAF2014の振り返りとSIAF2017の評価計画策定に係る主要コンテンツの確認 ・最終方向に向けたタスクとマイルストーンについてのディスカッション 	<ul style="list-style-type: none"> ・SIAF2014の振り返りとSIAF2017の評価計画策定についての初期的報告
参加者	実行委員会事務局 + 熊谷、光岡、小田井	実行委員会事務局 + 熊谷	実行委員会事務局 + 熊谷、光岡、大澤、小田井、永井	実行委員会事務局 + 熊谷、光岡、小田井、吉澤、大澤	実行委員会事務局 + 熊谷、永井、小田井

【分析データに対する補足】

実行委員会の収集したアンケート結果や広報の効果、有識者によるコメント等の様々な情報は実行委員会が開催年度内に作成した『札幌国際芸術祭2014開催報告書』にまとめられている。これはイベント全体の概観を把握してもらうことを目的としている。一方、本報告書はそうしたデータを踏まえて、評価軸に基づきさらに詳細な分析をすることを目的としており、不足データを補うための追加調査内容も収録されている。事前に評価の設計がされていたわけではないため、残念ながら、既にある情報は分析対象として十分なものではなかった。こうしたことは、他芸術祭の開催報告書等における比較検討可能なデータの蓄積状況にも同じことが言える。こういった状況もあり、文化事業であるSIAFの成果を性急に評価すべきではない。

事業評価を適正に実施するためには、今後も継続事業を実施するタイミングにおいて、評価軸に基づき、適正なデータ収集や調査を実施し、事業改善をその都度図るのが理想的であると言えるだろう。

1. SIAFを検証するための2つの評価軸

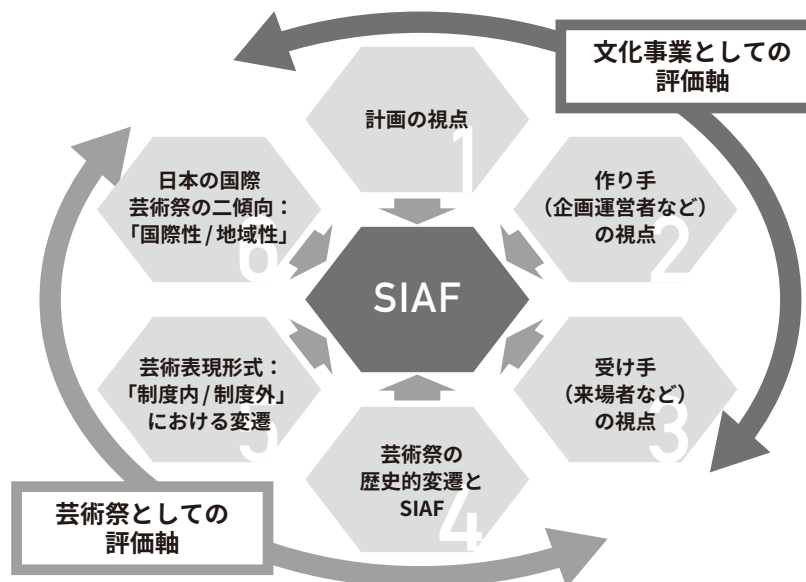
今回、SIAFを評価する上で、以下の3点を踏まえながら検証会を実施した。

- ① 2012年6月に策定した「札幌国際芸術祭 基本構想(以下、「基本構想」という)」に掲げている開催目的や期待される効果に対してSIAF2014はどこまで達成しているか。
- ② 国内の数ある芸術祭の中でのSIAFの位置づけや客観的にどのような評価を得ているか。
- ③ 今後の事業の方向性や重点化すべき点等SIAFの今後の可能性について。

そのために、評価の手法を幾つかの観点から整理した。具体的には、文化事業としての評価と芸術祭としての評価の2つに大別し、それぞれ3つの視点を導入して合計6つの視点で検証することにする。(【図表1】参照)
国際芸術祭のような大規模な芸術文化の事業の評価では、しばしば行政事業としての実践の評価と芸術祭のコンテンツの質の評価が混同される。例えば、現代アートの内容が難解であったから(質の評価)、来場者数が少なかった(事業としての評価)といったことが言われることが多いのもそのためである。もちろん芸術祭としての質が前提となり、文化事業が成功するのだが、行政事業としての運営等の実践と芸術祭としての質がそれぞれ一定レベルを保ってこそ、両者は効果的に相互作用を及ぼすこととなる。つまりいかに芸術の質が高くとも、事業としての広報計画や、運営状態等が十全に整えられていなければ、文化事業としても評価を得ることができるとは限らないのである。そのため、まずはそれぞれの達成度がどうであったかを評価し、その後両者の相関関係を検証するのが、順当だろう。

検証会では文化事業としての評価と芸術祭としての評価を2つの大きな評価軸とした。そして、それぞれを適正に評価するために、文化事業の評価としては「計画の視点」「作り手(企画運営者)の視点」「受け手(来場者等)の視点」から分析した。この3点は、SIAFを構成する様々なプレイヤーにとって事業が適正に行われ、良い影響を与えられたかを検証するために抽出した。また芸術祭としての評価に関しては、「芸術祭の歴史の変遷」「芸術の表現形式の『制度内/制度外』における変遷」「日本の国際芸術祭の二傾向『国際性/地域性』について」の3つの視点を抽出し、この視点で論じた。これは、SIAFが新しい芸術祭として出発したために、現在の芸術祭をとりまく状況と背景を整理し、その中でどのような位置にあるかを把握するための観点として、歴史と形式の変遷を踏まえた。その上で国際性/地域性の二軸から国内の複数の芸術祭をマッピングし、SIAFの現在の特徴を把握することを試みようとしたものである。

図表 1 SIAFを検証するために用いる6つの視点



1.1. 文化事業としての評価軸

1.1.1. 計画の視点

本来適正な事業評価を行うためには、計画段階で、事業計画として検討すべき観点が網羅されているか、加えてそれらの各検討は十分になされていたかを検証する必要がある。事業計画のPDCA(Plan-Do-Check-Act)計画～実施～検証～改善がスムーズに行われるような、検証作業の設計が必要であり、計画時点で検証のための仮説(評価軸に基づいたもの)が構築されていることが重要である。

計画段階に必要な資源は何か、資源投入後どのような変化を芸術祭期間中、あるいは芸術祭終了後に、中長期的に起こすことを意図するのか、そのためにどのような仕掛けを用意しようとしているのか、最終的にどのようなインパクトが生まれ、その結果変化を遂げた社会はどのような姿になっているべきなのかを検討しなければならない。

SIAFには基本構想は存在していたが、具体的な事業計画や評価軸は事業実施前の段階で明文化されていなかったため、事後的にそれらを明らかにすることにした。

そこで、基本構想を分かりやすい形に整理し、一連の評価を実際に行うために、芸術祭を通じた資源投入から社会への中長期的な変化を目指す、事業の論理的構造をロジックモデル¹として図解し提示することにした。(詳しくはP9で述べる)

1.1.2. 作り手(企画運営者等)の視点

事業計画を実行する上でどのような反省や教訓を得られたのかを検証する。行政による企画運営者への「ヒト・モノ・カネ」の提供が芸術祭の大きな特徴であるが、三つの要素のうち「ヒト」の部分に関しては多様性に富む場合が多い。(例えば、ディレクター、アートマネージャー、ボランティア、ローカル及び滞在アーティスト等は外部者が関与する場合が多い。)

特に、芸術祭を通して地域に変化をもたらすこと(=地域性)を重視する場合、作り手側の事業改善は単に次回へ向けてより無駄のない効率の良い運営への示唆を生むためだけに留まらない。なぜなら、関与する有償スタッフやボランティア、地元出身のアーティストは企画運営者(作り手)であると同時に来場者(受け手)でもあり得るからである。芸術祭開催後、あるいはその後の中長期に地域に変化をもたらすためには、企画運営の段階でこうしたローカルステークホルダー(地域の利害関係者)に対し適切な関与を引き出すためのマネジメントが必要になる。

従って、評価に当たり、SIAF関係者追跡調査にて把握した芸術祭のテーマの理解度、参加者の変化及び周囲の人への影響等の視点を用いて評価を行うことにする。

1.1.3. 受け手(来場者等)の視点

芸術祭の体験を通して意図した変化が、来場者及び社会にもたらされたのかどうかを検証する。

芸術祭によって起こそうとする「インパクト」(波及効果)は、来場者の変化や来場者によって起こされる変化等重層的である。そうした変化をモニタリング(観察)するためには、単純な来場者数や満足度についてのヒアリングだけでは不十分である。その意味で、企画段階で意図した変化に対しては、綿密なモニタリング体制の設計が不可欠だが、今回は事後調査のため、SIAF会期中に実行委員会が実施した既存のアンケートをクロス集計²する等して再分析することで検証を試みる。その他、芸術祭の受け手として、メディアや市外のアートファンを、「社会の反応」として捉え検証する。

1.2. 芸術祭としての評価について

1.2.1. 芸術祭の歴史的変遷とSIAF

昨今、日本全国各所で、国際芸術祭や地域のアートプロジェクト等が実施されており、地域振興を目的の一つとした芸術文化活動が盛んに実施されている。SIAFを評価するために、日本の国際芸術祭が海外の先行事例を参考にしながら、どのように展開してきたかの経緯を確認する。SIAFを既存の芸術祭と比較し、どのような位置にあるのかを把握するために、成功例といわれている「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」や「横浜トリエンナーレ」を参考にした。

1.2.2. 芸術表現形式：「制度内／制度外」における変遷

基本構想によればSIAFは「質の高い最先端の文化芸術に触れる多様な機会を提供する」ことを目標の1つとして掲げている。これはつまり現代アートの展示を重視しているということである。ここではSIAFにて紹介された作品がどういった位置付けにあるかを分析するために、まずはこれまでのアートの形式あるいは潮流の変遷の中で、芸術祭や地域アートプロジェクトがどのように発展してきたかを概観する。特に芸術としての正統的な評価ありきの表現として美術館等で展開していたアートが、美術館の外に出て展開をし始め、それが地域での活動につながり、ふたたび正統的評価に包括される国際芸術祭という形式と合流しつつある、という流れを仮説として、SIAFの位置付けを評価する。

1.2.3. 日本の国際芸術祭の2傾向：「国際性／地域性」

芸術祭の形態は、(1)国際性を重視し、海外作家の作品の展示を重視するものから、(2)地域に根ざした市民参加活動を中心に据えたアートプロジェクトを中核に置くものまで様々である。

現在、日本で実施されている芸術祭やアートプロジェクトを(1)と(2)の2つの特徴によって分類するとすれば、SIAFはそのどちらの方向性を重視していくのが妥当であると言えることができるだろうか。継続するSIAFの方向性を検討するための視点を提供する。

-
1. ロジックモデルは事業の質や内容を評価するための「施策の論理的な構造」を明らかにするための説明図であり、本検証会はロジックモデルを用いながら、実施した事業がどの段階であるかを検証した。
 2. クロス集計とはアンケートの設問項目について、2つの項目に注目して同時に集計すること。たとえば例えば、ある項目への回答が選択肢5つであったとすると、そのまま5つへの回答数を集計することを単純集計といい、この5つに対して性別や年代別など等別な要素への回答結果も含めて集計することをクロス集計という。

2. 文化事業としての評価軸

2.1. ロジックモデルの構築

SIAF2014を評価するためには、基本構想で目指されていたことを端的に理解し、また、その最終的な達成目標に至るまでの道筋を簡便に理解しやすい形にすることが必要である。基本構想は全方的に書かれているため、端的に理解するのは難しい側面もあり、芸術祭を実施した各年で特に目指されていたことが何か、その達成のためのステップはどう設計するのかを、基本構想を基に明らかにする必要がある。こうした出発点をおくことにより、実施している事業が何を射程に入れていたかが共有可能になる。そしてようやく具体的な評価の手法を選択することが可能になる。本検証作業では、実行委員会事務局及びアートマネジメントチームに対し、ヒアリングを実施し事業評価のための指標設計を行った。

それでは基本構想に含意されていたSIAF実施段階ごとに期待されていたこと、またはその波及効果はどのようなものであったのだろうか。

基本構想について、ヒアリングを通して咀嚼したところ、期待される効果として第1としては「芸術祭を経て最終的に変化を遂げた社会の状況」が期待され、第2に芸術祭の目的として「計画段階に必要な視点(それに紐づく資源)は何か」については明確に定義づけがなされていた。(【図表2】参照)

他方、第3に「資源投入後どのような変化を芸術祭期間中あるいは芸術祭終了後、中長期的に起こそうとするのか」、第4の「そのためにどのような工夫をしているのか」といったことについては、事業計画が明文化されておらず、計画段階では不明な点があったが、ワークショップ形式で2回に分けて実施したヒアリングとディスカッションを通してそれらは容易に明確化することができたため、実行委員会事務局では事前に共有されていたと推察される。

目的と効果の間のストーリーを細分化して論理的に体系化し、想像しやすい言葉で説明ができればその意義は大きい。事後的な事業検証及び目的達成への施策を導出することができる上に、そもそもSIAFが社会に対してどのような役割を果たすのかをストーリーとして明示することで、ほかの芸術祭やアートプロジェクトとの差異が明らかになる。そのためにも今後は第3及び第4の内容について明文化が望まれる。

本項目においては、実行委員会事務局のヒアリングを通じて明らかになったストーリーについて示す。まず、基本構想における「芸術祭の目的」と「期待される効果」の間にはどのようなロジックが考えられるのか、ストーリーを構築した。

別冊資料 1 札幌国際芸術祭基本構想(概要版)実行委員会作成

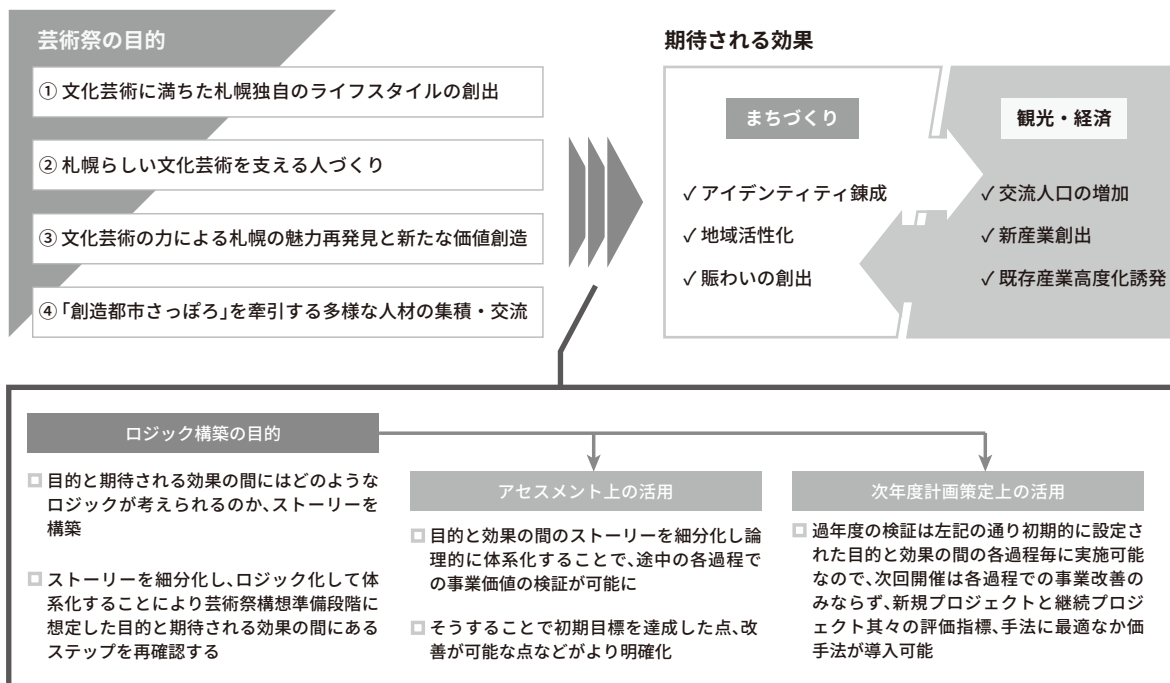
別冊資料 2 SIAF2014多様なステークホルダー

別冊資料 3 芸術祭のアセスメントについてのワークショップ資料 (SIAF2014事業評価検証会作成)

図表 2 SIAFの目的と期待される効果とその間のストーリーをブレイクダウン (基本構想より作成)

今回の札幌の芸術祭の目的と効果の間のロジックをブレイクダウン・ツリー化することで
評価ポイントの導出と次年度計画策定の足掛かりとする

札幌芸術祭の目的と効果の振返りとロジックツリーの意義



その後、ストーリーを細分化し、論理立てて(ロジック化して)体系化することにより、基本構想で想定した目的と期待される効果の間にあるステップを再確認した。

このように、目的と効果の間のストーリーを細分化し論理的に体系化することで、途中の各過程での事業価値の検証が可能になり、初期目標で達成した点、改善が可能な点等がより明確化する。さらに、過年度の検証は上記の通り初期的に設定された目的と効果の間の各過程で実施可能となるため、次回開催時は各過程での事業改善のみならず、新規プロジェクトと継続プロジェクトそれぞれの評価指標に最適な評価手法が導入可能になる。こうしたことを論理構造化し、図式として示したものがロジックモデルである。

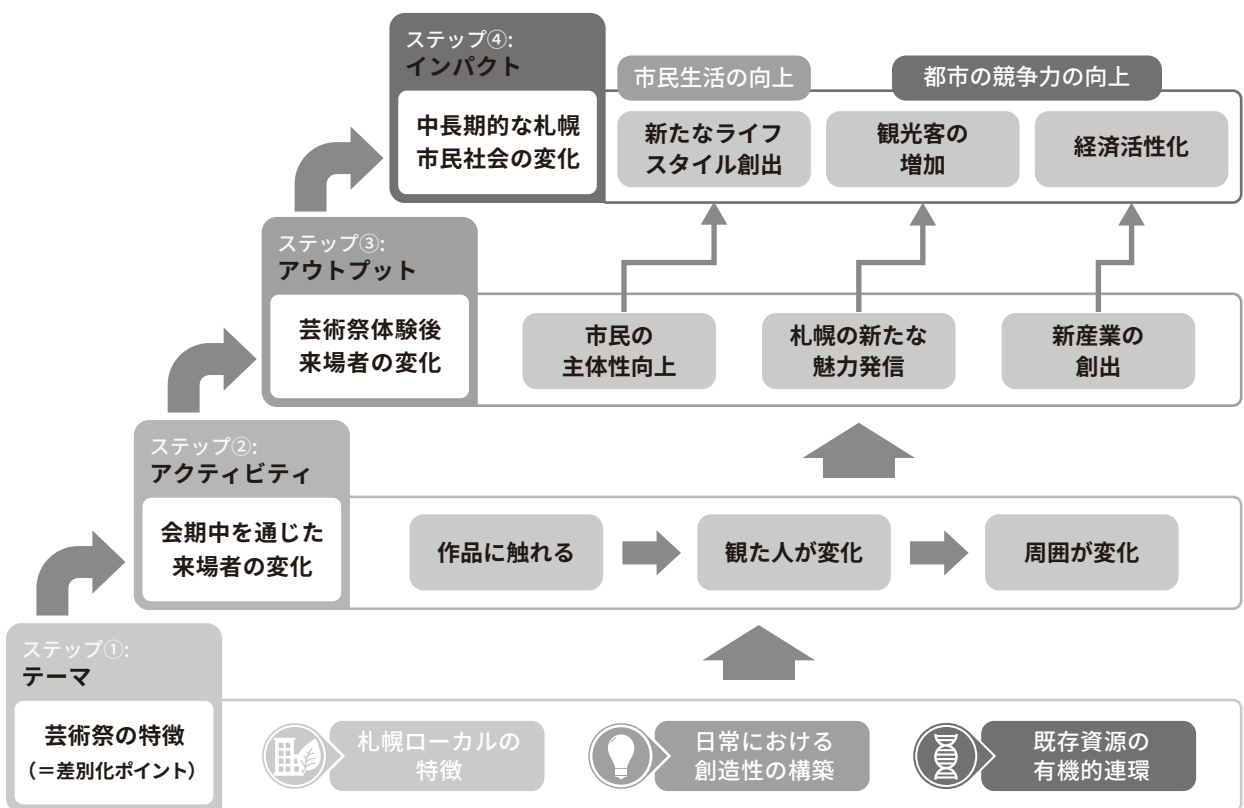
次段階では、ロジックモデルを構築し精査するために、検証会と実行委員会事務局でディスカッションを実施し、芸術祭を通じた資源投入から社会への中長期的な変化をロジック化した。

具体的には、芸術祭の特徴と差別化のポイント(=「テーマ」)、会期中を通じた来場者の変化(=「アクティビティ」)、芸術祭体験後の来場者の変化(=「アウトプット」)、中長期的な札幌市民社会の変化(=「インパクト」)へと所与の目的へと通じるロジックをツリー状にモデル化した。(次項【図表3】参照)

2.2. 計画の視点

前項で述べたように、ロジックモデルを活用した文化事業の評価は、内部関係者が明文化されずとも共有していた様々な視点を明らかにし、一般に共有することを可能にする。ここからはその4つのステップとして設定した「テーマ」「アクティビティ」「アウトプット」「インパクト」の内容について詳述する。こうしたロジックモデルを採用した事業評価は欧米では既に先行事例が多くあるが、日本ではまだ珍しい。そのため、SIAFでのロジックモデルの構築は仮説を大いに含むが、文化事業の1つの評価手法として先行事例になると考えられる。

図表 3 SIAF2014 評価のためのロジックモデル



検証会によるヒアリングを通して、ステップ①の「テーマ」では、大勢の市民が力を合わせ既存資源を活用することで、札幌ローカルな魅力を発信し、さらにはその活動を通して参加した人々が日常における創造性の存在に気付く端緒とすることを目的にしていると分かった。基本構想における展開方針から要素を抽出し、「札幌ローカルの特徴」「日常における創造性の構築」及び「既存資源の有機的連環」の3つのキーワードで特徴づけられると結論づけた。(【図表4】参照)

図表 4 SIAFの3つの特徴



基本構想を3つにブレイクダウン

SIAFにおける3つの特色(テーマ)

<p>テーマ① 札幌ローカルの特徴</p>	<ul style="list-style-type: none"> ✓ アーティストが札幌の新しい魅力を発見し、提示する ✓ 札幌の課題解決のきっかけが生まれる ✓ 創造都市として、国際的な競争力が高まる
<p>テーマ② 既存資源の有機的連環</p>	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 札幌の地域資源の新しい活用法が発見される ✓ アーティストだけでなく、市民、自治体など地域の多彩なプレイヤーが新たにネットワークを築く ✓ 築かれたネットワークによりコミュニティで抱える課題や将来の方向性について幅広く議論が行われ表現へつながる
<p>テーマ③ 日常における創造性の構築</p>	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 日常生活の中に市民が新たな価値を発見する ✓ 市民が創造的な活動に従事ようになる ✓ 市民がより文化的で豊かな生活をおくるようになる

まず、1つめのキーワード、「札幌ローカルの特徴」とは何か。

基本構想の開催目的に「①文化芸術に満ちた札幌独自のライフスタイルの創出」「②札幌らしい文化芸術を支える人づくり」「③文化芸術の力による札幌の魅力再発見と新たな価値創造」「④創造都市さっぽろを牽引する多様な人材の集積・交流」とある。

検証会はこの意味を、札幌において、新しい価値の発見を、文化を通して実現するということと解釈した。既に札幌は観光都市として確固たるものがあるが、そのイメージは長年固定化しがちである。基本構想には、「創造都市」として札幌の新たな魅力を発信していきたいという想いが込められており、具体的には、アーティストがSIAFの中で作品を通して札幌の新しい魅力を発見し提示すること等があげられている。アーティストの作品から提示される問題提起や手法は必ずしも明確なものばかりではないが、そこには、よりよい市民社会へ向かうための「きっかけ」が内包されている。また、同時に、創造的な視点が備わった都市としての国際的な競争力の向上にも期待が寄せられている。

2つめの、「日常における創造性の構築」についてだが、これは基本構想の開催目的「④創造都市さっぽろを牽引する多様な人材の集積・交流」の前提となる想いを提示したものである。札幌は、観光地であるという以前に市民が日々生活を営む場所である。その意味で芸術祭が契機となって、市民生活が一層創造的なものになるようにとの願いが込められている。将来的には、SIAFの開催を通して、市民・自治体等地域の様々な人材が、新たなネットワークを構築し、築かれたネットワークによりコミュニティが抱える課題や将来の方向性について幅広く議論が行われること、また、何らかの創造的な活動に主体的に従事することを期待している。

3つめの、「既存資源の有機的連環」については、基本構想の展開展開方針に述べられている内容を整理した。展開方針では「既存の文化事業との連携」「札幌の魅力を体験する観光イベントとの連携」「民間ギャラリーやアート関連団体との連携による企画展示」等既存資源との連携が盛り込まれている。つまり、SIAFの体験をきっかけとして市民が力を合わせて身の回りの環境や資源を関連させながら新しい視点で活用し、街の明日を一層快適に、楽しいものに変えていく創造性を獲得してほしいという想いが込められていると解釈した。

次にステップ②の「会期中を通じた来場者の変化(=「アクティビティ」)」は、作品に触れた来場者に内面・外面の変化をもたらし、その来場者が周りと触れ合うことで、周囲の人へも来場者の変化を伝播させることを想定している。このことから、来場者が作品に触れた結果その後の行動や考え方が変化し、その来場者と交流した他者をも巻き込んで、多くの人の行動や考え方が変化する波及効果の過程が生まれると考えた。

ステップ③の「芸術祭体験後の来場者の変化(=「アウトプット」)」とステップ④の「中長期的な札幌市民社会の変化(=「インパクト」)」は、<市民生活の向上>と<都市の競争力の向上>という2つの文脈それぞれでの変化を想定している。前者については、市民の主体性が向上し、3つの特徴で込められた想いで述べたように、SIAF2014構想段階では、暮らしの中で課題解決や創造性を発揮するために動き出すことで新たなライフスタイルの創出ができるのではないかと想定していた。後者については、競争力を観光客の増加と経済活性化の2点と定義づけることでそのために必要な変化、すなわち札幌の新たな魅力が発信されること、新しい産業が創出されることが起きるのではないかと想定していた。

以上が、事後的なヒアリングとディスカッションにより明らかになった事業計画の中身であり、資源投入後どのような変化を事業実施中あるいは事業実施後に、中長期的に起こすことを意図するのか、ということがロジックモデルとして明らかになったものである。

当然ながらロジックモデルが想定通りに作用するかは未知数であるが、ロジックモデルの各過程で、実際のSIAFの開催と会期後の社会で何が達成されたのかを検証し、改善への道筋を継続的につけていくことが重要である。本事業検証では次章以降、「作り手(企画運営者等)の視点」及び「受け手(来場者等)の視点」の検証を行い、このロジックモデルで提示されたストーリーに沿って、「中長期的な市民社会の変化(=「インパクト」)」の達成を検証することにする。

2.3. 作り手(企画運営者等)の視点:事業計画意図の実現度について

本項では、検証会が設計し2015年夏に開催地域で実施したSIAF関係者追跡調査について検証する。

この調査はロジックモデル(【図表3】参照)に基づき、ステップ②の「アクティビティ」を検証するものである。

会期中を通じて、来場者がどう変化したかを、「作品に触れる」と「観た人が変化」し、「周囲が変化」と想定し、SIAF2014ではどこまで到達しているかを調査しようと試みた。このロジックモデルでは「来場者」となっているが、観客に留まらず、SIAFに主体的に参加した全ての市民の意識がどのように変化したかを検証しようと試みた。その理由の一つは、SIAFが、ソーシャルキャピタル(社会関係資本)³の醸成を図ろうとしていると本検証会で仮定したからである。地域や社会における信頼や結びつきが、芸術祭を通じて向上すれば、社会の効率性が高まり、ひいては創造都市の実現に寄与すると考えたのである。

また、SIAFでは、SIAFに直接関わる人ばかりでなく、「みんなでつくろう！札幌国際芸術祭」という呼びかけを行い、関わる人全員が主体的な作り手になるのではないかという発想があったため、関連イベント等への関与者も含めて作り手と捉えた。本項では、意識変化に関わる項目について重点的に分析する。⁴

この調査は、SIAFに関わった連携事業者、自主事業者、プログラム協力者、実行委員会事務局等事業運営関係者を対象に、その属性やこれまでの活動、またSIAFの開催を通しての意識の変化等について問うたものである。

そのため「関わった人の変化」を追うため、アンケートとヒアリングの二種類の調査方法を併用した。量的調査、数的指標を評価軸としながらも、そこからこぼれ落ちる人の変化の詳細を記録し、細かなエピソードを収集するため、ヒアリング(質的調査)も実施した。その上で、仮説検証を試みた。

ここでは特にアンケートの単純集計及び、クロス集計、質的調査の分析結果を明らかにする。ヒアリング内容詳細は別冊資料を参考にされたい。

3. 人々が持つ信頼関係や人間関係(社会的ネットワーク)の醸成により、社会の効率性を高めるという概念。

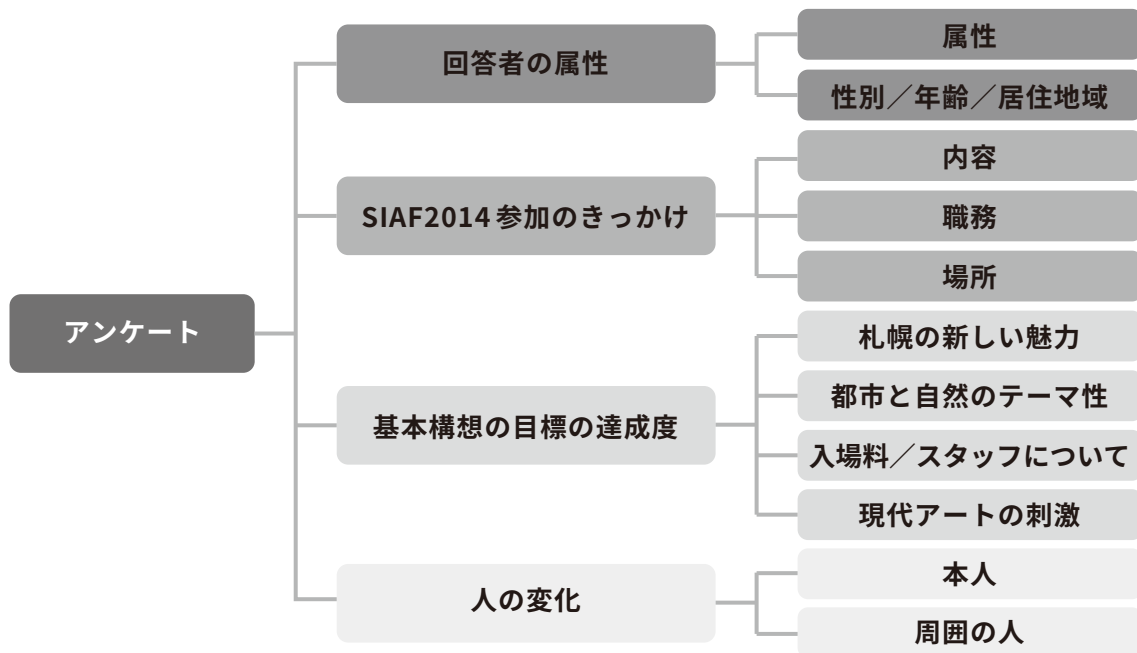
4 アンケート設問詳細については別冊資料2.2.参照のこと。

まず、関係者を対象に実施した主なアンケートの設問内容であるが、回答者の属性を踏まえつつ意識調査を行うことを目的としている。特に今回はロジックモデルステップ②に該当する部分、すなわち SIAF 関係者の文化事業に対する主体性の向上があったかどうか、それが周囲に波及したかを明らかにするために、調査を実施した。（【図表 5】参照）

調査概要

- 内 容・・・ SIAF2014 の関係者の属性やこれまでの活動、また SIAF2014 実施を通しての意識変化等
- 方 法・・・ アンケート調査
- 対 象・・・ 連携事業運営者、参加作家、プロジェクト協力者として SIAF2014 実施に関わった札幌市民、及び実行委員会事務局等事業運営関係者のうち 2015 年 5 月時点で実行委員会事務局にて氏名、住所、メールアドレスが確認できた方々
- 期 間・・・ 2015 年 5 月 27 日～6 月 3 日
- 送付数・・・ 231 (郵送、Eメール)
- 回答数・・・ 127

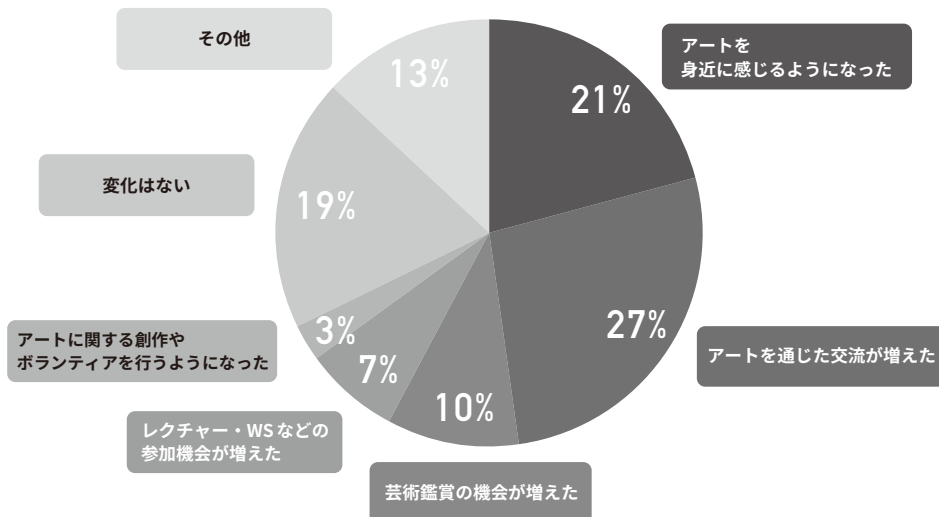
図表 5 関係者を対象に実施したアンケートの主な内容



単純集計結果(抜粋)

本アンケートでは、SIAF2014に関わった人はSIAFを体験し、どのような変化を感じているかを調査した。

図表 6 「自身の変化」アンケート結果⁵



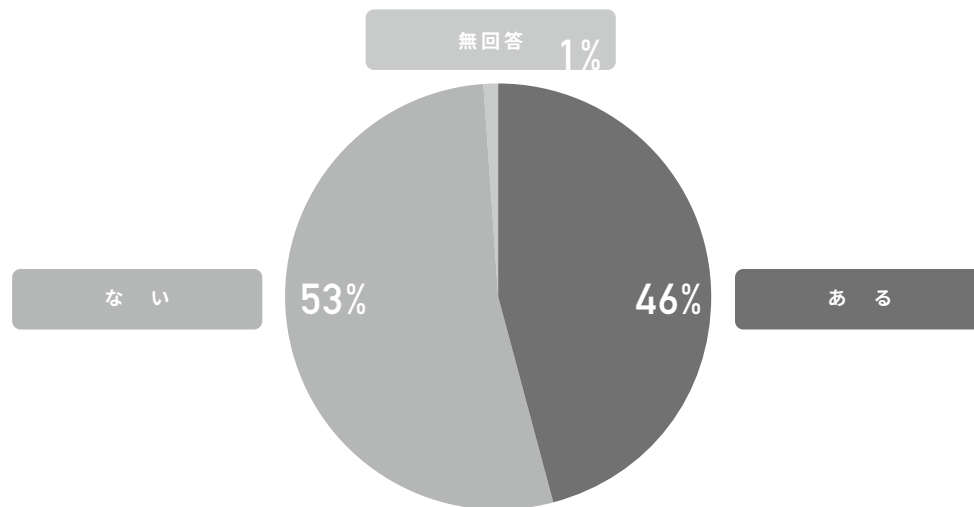
アンケートの単純集計によれば、SIAFに関わることで、自身に何らかの変化を感じている人は7割程いた。この問7は、選択肢1から5にかけて徐々にSIAFへの関わり度合いが深くなっている。仮説としては、関わり度合いの深いものほど人数が減ると考えた。実際の結果も予想通り「アートを身近に感じるようになった」「アートを通じた交流が増えた」「芸術鑑賞の機会が増えた」等の比較的受動的なアクティビティへの参加は約6割だが、「レクチャー・WSなどの参加機会が増えた」「アートに関わる創作やボランティアを行うようになった」といった主体的なアクティビティへの参加は1割程度に留まっている。(【図表6】参照)

5. 設問：SIAFにかかわって、ご自身に以下の選択肢のような変化はありましたか。1から7番のうちあてはまる番号全てに○をつけてください。その他、エピソードがあれば、どんなことでもいいのでお書きください。(複数回答可)

- 1 SIAF以前よりも、アートを身近に感じるようになった
- 2 SIAF以前よりも、アートを通じた友人や知人との交流が増えた
- 3 SIAF以前よりも、展覧会やコンサート等の鑑賞機会が増えた
- 4 SIAF以前よりも、レクチャーやワークショップ等の参加機会が増えた
- 5 SIAF以前よりも、アートに関わる創作や実演、ボランティア等を行うようになった
- 6 SIAF以前からとくに変化はない
- 7 その他、エピソードなど等[自由筆記]

注、図表6の中ではレイアウトの関係上、簡略した表現で記載

図表 7 周囲の人物に変化はあったか⁶



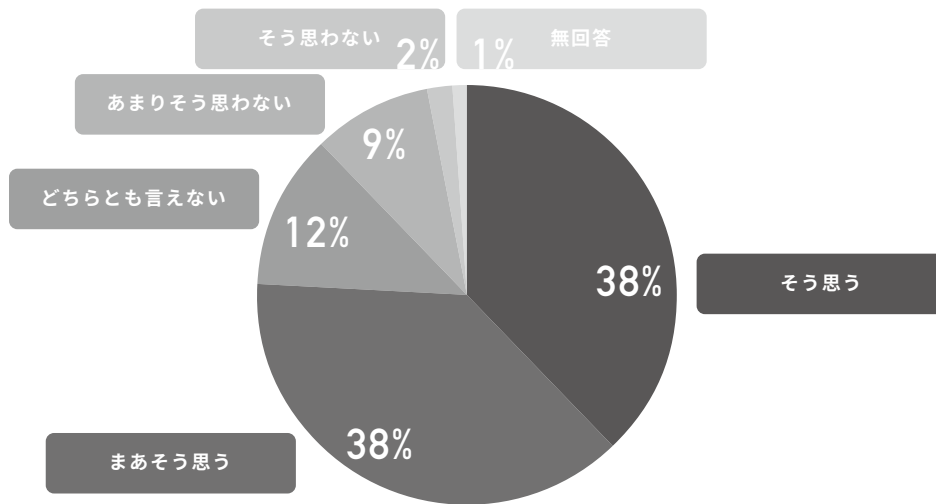
問8の周囲の人物の変化に関しては「ある」と答えた数と「ない」と答えた数が拮抗している。この結果自体は初回調査ということもあってポジティブともネガティブとも言えないが、今後の継続調査によって傾向は見えってくるだろう。第1段階として直接関わった人に変化が現れ、その内容が受動的なものから主体的なものへ移行し、その後次第に社会にまで波及効果があると想定されるため、そのような変化が起きるかを今後の継続的な調査で見極めたいところである。（【図表7】参照）

6. 設問：SIAFにかかわって、周囲の人(家族、近所の人、同僚、友人等)に何か変化はありましたか。
どちらか1つに○をつけてください。

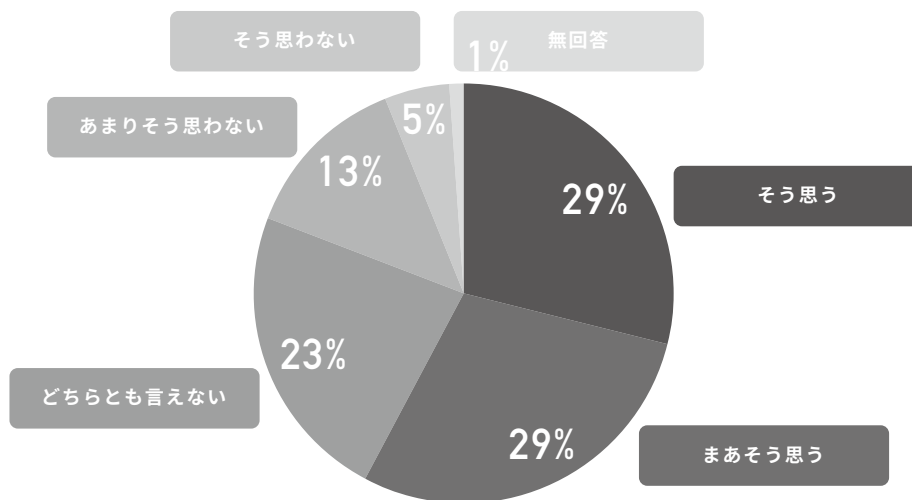
1 ある 2 ない

次にSIAFでは、企画の内容で伝えようとしていたことがどれだけ浸透していたかについてもアンケートで調査した。

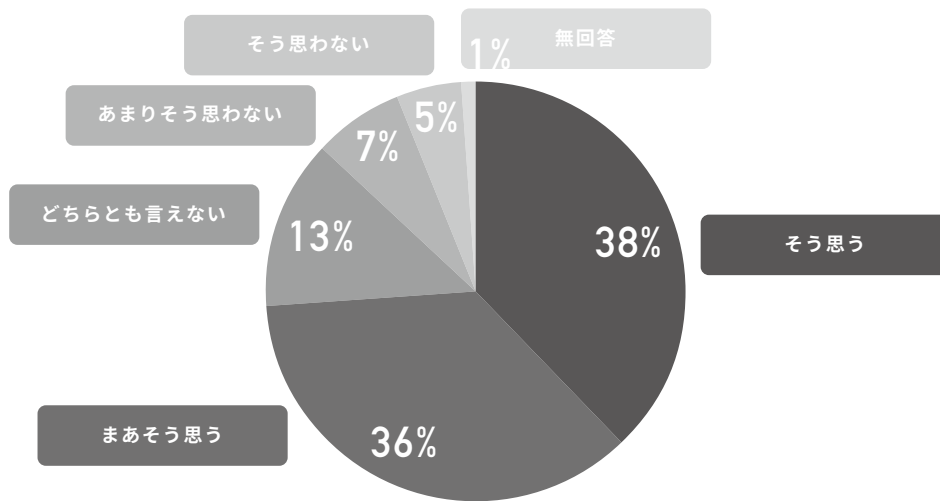
図表 8-1 都市と自然というテーマを感じた



図表 8-2 札幌の新しい価値を見つけた



図表 8-3 現代アートに刺激を感じた



「都市と自然というテーマを感じた」(【図表 8-1】参照)「札幌の新しい価値を見つけた」(【図表 8-2】参照)「現代アートに刺激を感じた」(【図表 8-3】参照)の問いでは、それぞれ認知度を確認したが、「都市と自然というテーマを感じた」「現代アートに刺激を感じた」に関しては8割近くと高い数値を示しているが、「札幌の新しい価値を見つけた」のみ6割程度に留まっている。

これは、このアンケートは札幌市内のSIAF関係者を対象にしているため、札幌市の魅力に関しては既によく知っており、企画によって新たな魅力を発見するまでには至らなかったのではないかと想定される。テーマ性や現代アートを楽しんでもらうばかりでなく、より札幌市の既存の地域資源を活用した企画内容等により新奇性を感じてもらうための工夫が必要であろう。

クロス集計結果(抜粋)

「問7-2 アートを通じた交流が増えた」に該当すると答えた人は、おそらく周囲の人に影響を及ぼしていると仮定していたが、周囲の人に変化が「ある」と答えたのは37%であった。このことから、ロジックモデルの「観た人が変化」までは明らかだが、その波及効果としての「周囲が変化」までは至っていないといえる。(【図表6】【図表9】参照)

一方で問7-3から問7-5にかけて、SIAFへの関わり度が深くなるにつれ、周囲の人の変化を感じている割合が減っている。このことは、SIAFへの関わり度が深い人ほど、周囲の人の変化の有無について厳しい視点を持っていたか、あるいは、その人の周囲の人もそもそも関わり度の深い人ばかりだったために、特に変化がなかったとみている、という2通りの解釈が可能である。(【図表9】参照)

図表 9 自身の変化 × 周囲の人の変化

問 8	総数	問 7-1	問 7-2	問 7-3	問 7-4	問 7-5	問 7-6	問 7-7
ある	84	19%	37%	8%	6%	4%	10%	17%
ない	96	24%	18%	11%	7%	2%	28%	9%
無回答	2	0%	50%	0%	50%	0%	0%	0%

※総数は本データ分析上のもので SIAF 関係者追跡調査の回答数合計とは一致しない。

問 7-1 アートを身近に感じるようになった

問 7-2 アートを通じた交流が増えた

問 7-3 芸術鑑賞の機会が増えた

問 7-4 レクチャー・WS 等の参加機会が増えた

問 7-5 アートに関わる創作やボランティアを行うようになった

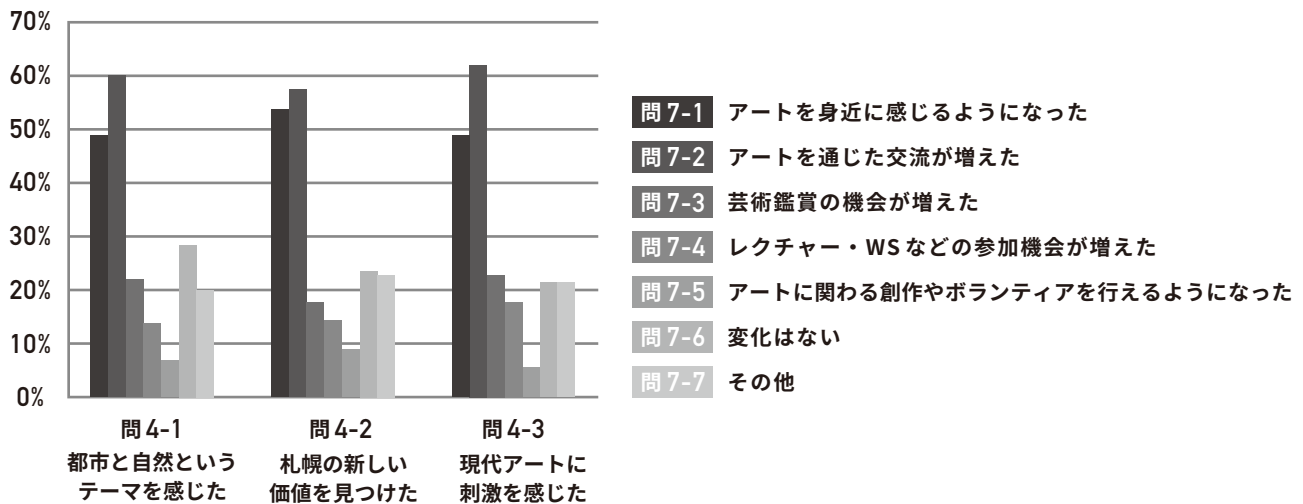
問 7-6 変化はない

問 7-7 その他

問 8 周囲の人物の変化はあったか

次に、問 4 の SIAF で伝えようとしていた 3 つの内容が明確に伝わっていたかということと、SIAF に関わることで生まれた自分自身の変化との関連度を検証する。それぞれのテーマの認知度により、「観た人の変化」の性質に差があることを想定していた。例えば、「現代アートに刺激を感じた」人は、「札幌の新しい価値を見つけた」人よりも、より深く SIAF に関わっているなどの結果が得られるのではないかと想定していた。ところが、実際は認知したと表明したテーマと問 7-1 から問 7-7 までの回答数の遷移はあまり変わらなかった。つまり、SIAF の内容のどの部分を認知していたかに関わらず、問 7 の回答の選択肢のより深い関わりを持ったかを問う質問への肯定的な回答数が減っていくことは共通していることも興味深い。このことから、SIAF の内容のどの部分に魅力を感じていたかと、関係者が SIAF に関わった度合いについては相関性がないと分かる。(【図表 10】参照)

図表 10 芸術祭の3つの内容と自身の変化の相関について



以上のように、「①連携事業全主催者＋意識的に並走する活動をしていた個人」に対して実施したアンケート調査と併せ、グループインタビューに協力する回答者を募り、2回に分けてヒアリング調査を実施した。また、連携事業主催者以外のアート関係者の中から「②参加型プロジェクト及びプログラム参加者」「③SIAF2014 出品参加作家及び作品の制作協力者」「実行委員会事務局の市職員並びにプロジェクトマネージャー、テクニカルスタッフ、会場運営スタッフ」等も調査対象とした。本調査は、アンケート調査をベースとした半構造化インタビューの手法をとった。⁷

聞き手はSIAFのプロジェクトマネージャーやアシスタント、大学院生や大学生等、SIAFや芸術祭の背景や内容を比較的良好に知る立場の者があつた。このように内部に近い人物が調査にあたるケースでは、良い／悪いいずれも直裁な意見が出やすい、具体的な提案や改善案が出やすいといった傾向があるが、このインタビュー調査でも同様の結果となったようである。とりわけ「札幌におけるSIAF2014実施後のヒアリング調査まとめ」は、SIAFに限らず、これまで札幌で、さまざまな立場や目的で芸術文化に携わってきた人々の、SIAFに対する実践的な提案が多く含まれている。アンケートでも問うた内容に加え、具体的な、会場ごとの社会的文脈や施設設備の違いと対応の仕方、作品に対する来場者の生の反応、ボランティアの可能性と課題等、重要なエピソードばかりである。このインタビュー調査を細かく分析することも可能であるが、より現実的で実践的なことは、主催側がこれらのインタビュー結果を読み込み、個々のエピソードを今後の方向性を見極めるために活かすことであろう。

別冊資料 4 SIAF 関係者への追跡調査及び開催地域への波及に関するレポート

- ① 札幌におけるSIAF2014実施後のアンケート調査設問/集計/コメント
- ② 札幌におけるSIAF2014実施後のヒアリング調査まとめ
- ③ 札幌(地域)のSIAF2014の受けとめかたに関するレポートと資料集
- ④ SIAF2014公式振り返りイベント開催記録(コメント集)

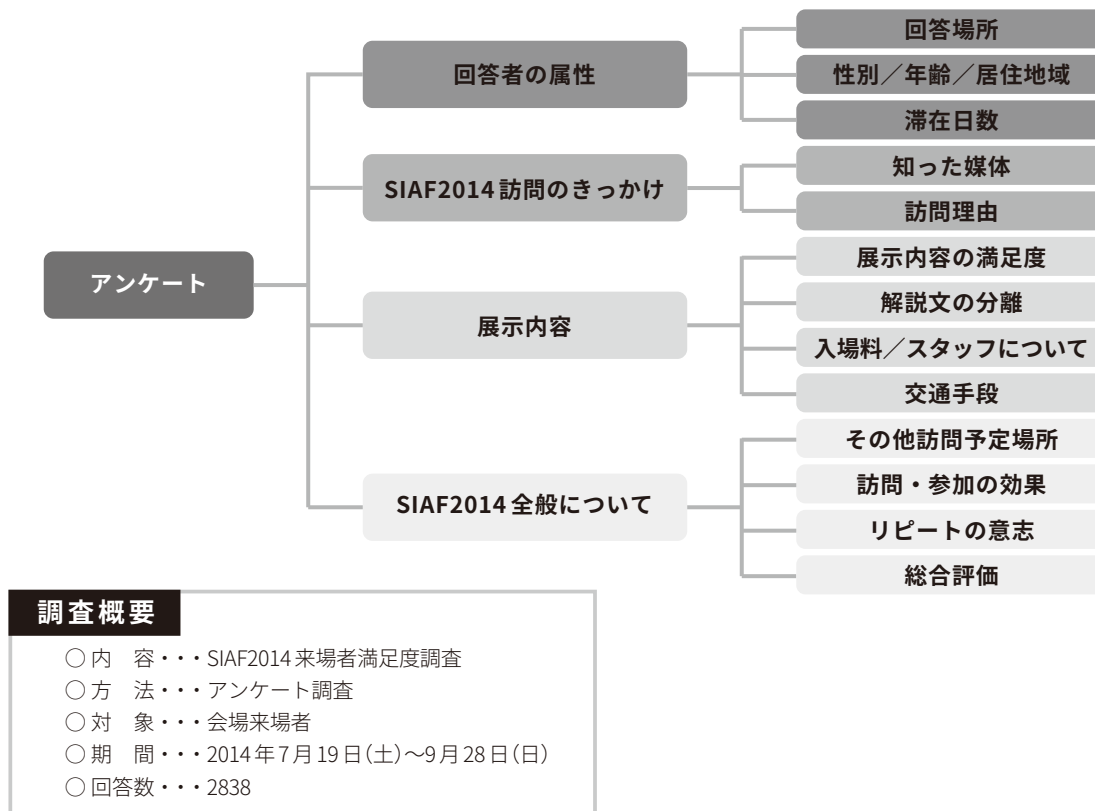
7. 半構造化インタビューとは事前に大まかな質問事項を決めておき、回答者の答えによってさらに詳細にたずねて行く簡易な質的調査法のことで、長時間のインタビューが行えない場合等に効果的である。

2.4. 受け手(来場者等)の視点

2.4.1. SIAF 来場者アンケート集計結果の再分析による検証

「受け手(来場者)の視点」であるが、SIAFの体験を通して意図した変化が、来場者及び社会において実際に起こっていたかどうかを検証する。⁸

図表 11 各会場で実施したアンケートの主な内容



ここでは、SIAF2014 会期中に実施した「SIAF 来場者アンケート」(以下、「来場者アンケート」という)を再分析することで評価を実施する。前述の通り、ヒアリングやディスカッションを通して事後的に明らかになった事業実施時に想定されていたであろう仮説(つまり【2.1.】で意図したロジック)や手段の適切さを検証する点で『札幌国際芸術祭 2014 開催報告書』にまとめられている来場者アンケートの分析目的とは異なる。

まず、各会場で実施した主なアンケートの質問内容であるが、回答者の属性から SIAF2014 の総合的な評価まで包括的な内容になっている。(【図表 11】参照)

特に、検証に当たっては、SIAF の認知度をあげるために講じた施策や計画の適切さの検証に重点を置く。来場者アンケート再分析に当たっては、クロス集計を用いることで、より多くの示唆を期待する。

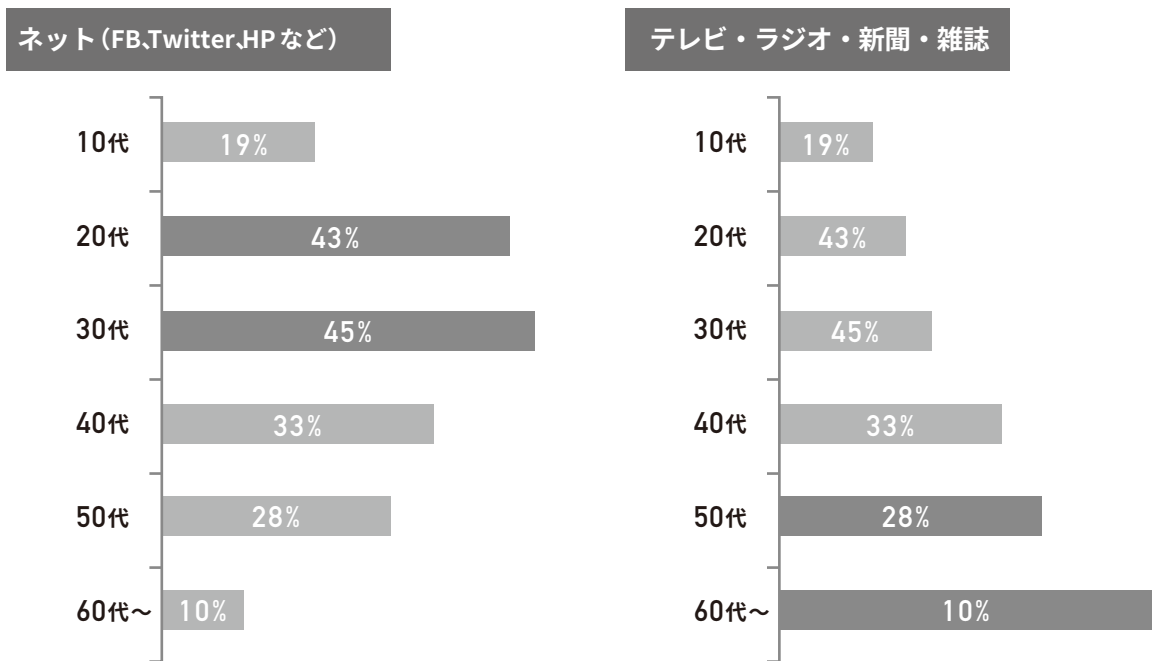
なお、分析の中では、認知度を上げるために講じた施策、来場者がストレスなく展示を鑑賞するために講じた施策、及び全体的に満足度を高めるために行った種々の施策について興味深い示唆があったので下記に述べる。(他のクロス集計結果については別冊資料参照のこと)

まず、認知度を広げるために講じた施策は、年代別・居住地別に属性ごとの分析を行った。⁹

8. アンケート詳細は別冊資料 2.2. 参照のこと。

9. こうした属性分類は一般に「セグメンテーション」とよばれる。分析主題に対して同じ嗜好を持っているかどうかを観点にグループ化することが一般的。本稿でも同様。

図表 12 「年代別、SIAF2014を知ることになったきっかけ」の分析結果(抜粋)

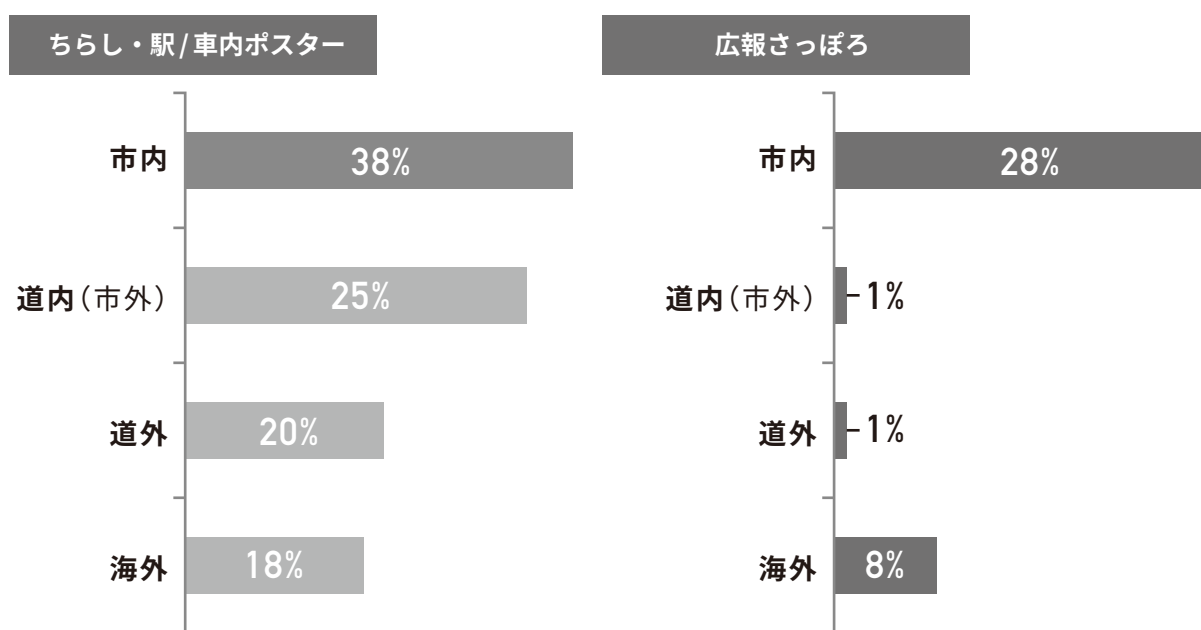


上記割合(%)は、当該質問に対して、各回答について年代別回答数の割合を示す

年代別には、年代が上がるにしたがい、インターネットを利用する割合が減少傾向にあると想定されるが、SIAFの告知に当たっては、ちらしや広報誌等にも力が入れられていた。来場者アンケートの再集計結果によると、紙媒体の広報効果が十分であったことが示されている。

高齢の世代になると、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌等公共メディアによる認知の割合が高まっている一方、若年世代に対してはFacebook・Twitter等のソーシャルネットワーキングサービスが有効であることが示されている。この来場者アンケートの再分析結果からは、幅広い世代にアピールするためには、複数のチャンネルの利用を前提に、世代に応じた広報媒体を選択していくことが重要である。(【図表12】参照)

図表 13 「居住地別、SIAF2014 を知るようになったきっかけ」の分析結果(抜粋)



上記左グラフの割合(%)は、当該質問に対して、「広報さっぽろ」と回答した回答者全体の36%の人々のうち居住地別内訳を示す
 上記右グラフの割合(%)は、当該質問に対して、「ちらし・駅/車内ポスター」として回答した回答数を母集団として回答者の居住地別内訳を示す

さらに、居住地別に見た調査結果においても、札幌市内の人にはインターネットだけでなく、日常生活の中で目に触れる広報媒体が有効であったことが分かる。例えばSIAFについて知ったきっかけとして「ちらし・駅/車内ポスター」が38%、「広報さっぽろ」が28%と高い数値を示しており、物理的な広報物による宣伝効果が高いことが示されている。(【図表13】参照)

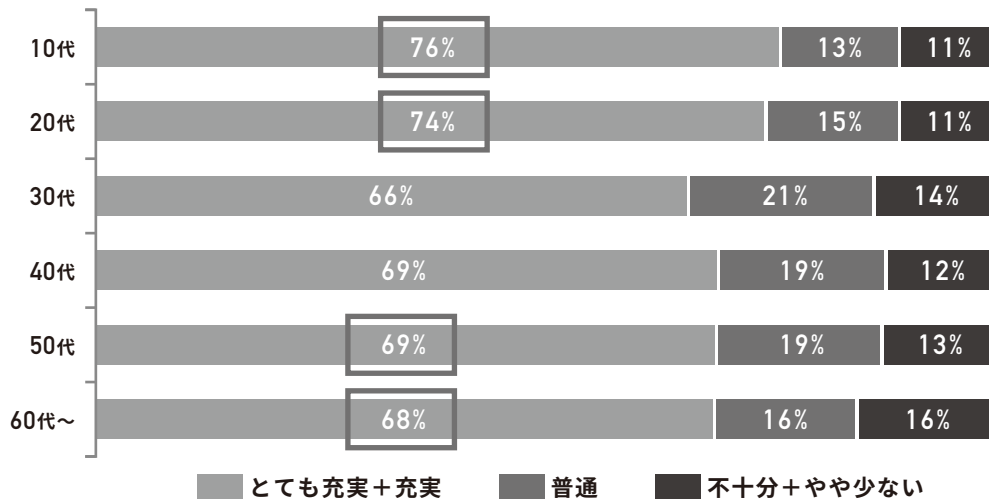
第2に、来場者がストレスなく展示を鑑賞するために講じた施策であるが、これは世代別に来場者を属性ごとに分類し若年世代・高齢世代にも満足させるような説明表示方法(キャプション¹⁰や案内板等)だったかを検討する。美術館や芸術祭の鑑賞体験の調査等¹¹によれば、年配の人は多くの説明を読みたがる傾向にあると言われているが、調査結果によれば年配の人にも満足してもらえる十分な説明量だったと分かる。他方で、高齢世代と比較して若年世代は作品説明を読み込むよりも作品と向き合うことに時間を費やす傾向にあると考えられているが、この層の満足度も高いため説明表示が一瞥して理解できるものだったと考えられる。クロス集計による再集計の結果、若年世代にも、高齢世代にも説明の分量については一定の満足度を得ていることが分かった(【図表14】参照)。おそらく、キャプションや案内板、ハンドアウト等での説明文のレイアウトやデザイン等が年齢問わず読みやすいものであった。一方でこの結果には、来場者がそもそも説明文に気を配っていなかった可能性もあるため、本項目については質問項目、および調査手法を変更することを検討する余地がある。

また、市外に紙媒体が十分に訴求している(ともに20%以上)ことが分かるが、ポスターとちらしの間の効果の割合を知るためには、次回以降のアンケートの設問をより詳細に設定すべきである。

10. キャプションとは、展示物の説明札のこと。

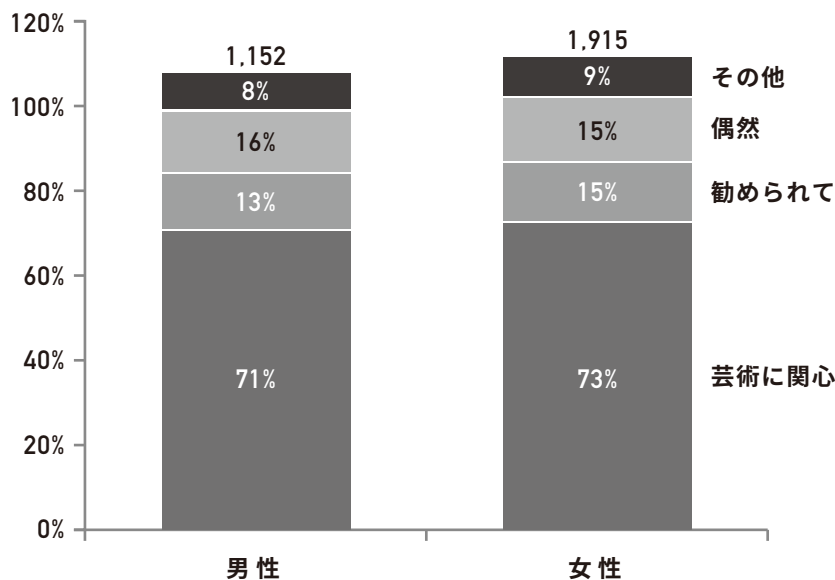
11. 村井良子編著『入門ミュージアムの評価と改善—行政評価や来館者調査を戦略的に活かす—』アム・プロモーション、2002年
 『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2012 東葛報告書』大地の芸術祭実行委員会、2012年

図表 14 「世代別、SIAF2014 解説分量の満足度」の分析結果



第3に、全体的に満足度を高めるために行った種々の施策について検討する。公共事業であるため、全ての層に満足してもらうことが理想的であり、施策段階では性別別・年代別に一般的に関心が薄い層に対して重点的に興味を持ってもらえるように心掛けることが重要だ。そこで、性別別にSIAFの訪問理由を検証してみると、SIAFの訪問理由に男女の差は特に見られなかった。一般的に芸術祭に関心が高いとされる女性だけではなく、男性にも興味を持ってもらえたことは評価に値する。(【図表15】参照)

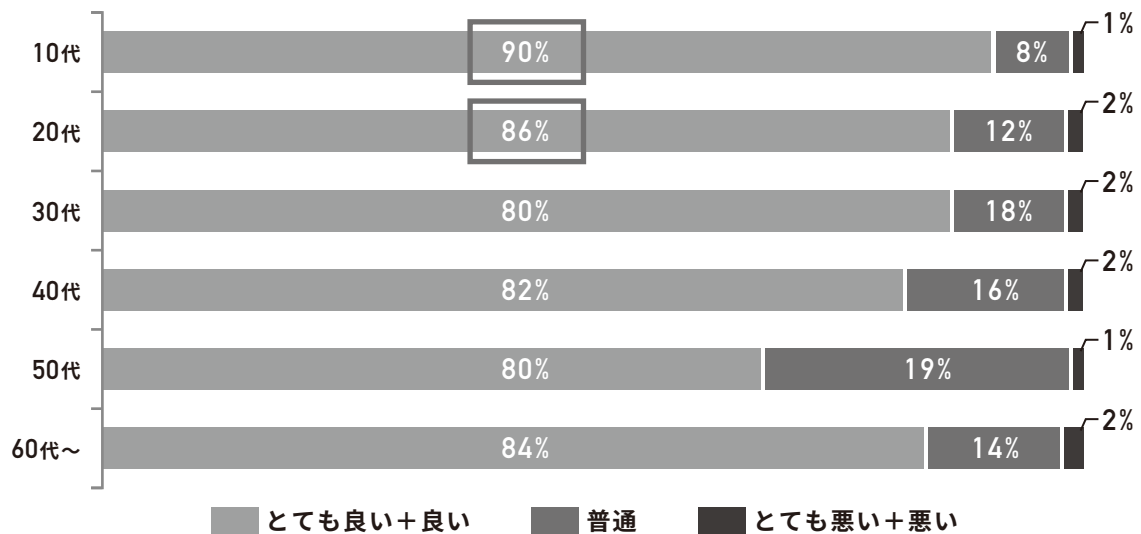
図表 15 「性別別、SIAF2014 訪問理由」の分析結果



美術館鑑賞体験の調査における男女比の傾向を踏まえると、男女比に差がないのは興味深い結果と言える。これはそもそも札幌市における文化芸術への関心度に男女差がないか、あるいは広報が男性にも響きやすい手法を用いていたと考えられる。札幌市内の文化芸術への関心度の性差については、別途札幌市で実施している文化芸術関係の調査結果との比較が必要であろう。

また、アンケートの再集計の結果、10代の来訪者の満足度が非常に高かったことが分かった。(【図表16】参照)美術館鑑賞体験の満足度調査等では10代には現代アートは「受けが悪い」と言われているが、この結果は作品説明が若年層にも分かりやすいものだったと考えられ評価できる。また、現代アートの愛好者が少ないと言われている高齢者の満足度が非常に高い点も評価できる。

図表 16 「世代別、SIAF2014 満足度」の分析結果



SIAFは、これまで触れる機会が少なかった現代アートを魅力的に伝えることに成功しているようである。ただし、一般的な調査の傾向として5段階評価の手法では、曖昧な回答が集まりやすく、年齢層ごとの満足度が的確に把握しづらいという傾向がある。そのため、プラス反応をする来場者のアンケート偏向が各世代で同様に出ている。従って、これ以上の満足度を把握したいのであれば、アンケートの設問自体を工夫し、例えば自由回答欄、インタビュー等を利用してより丁寧に満足度について追う必要がある。

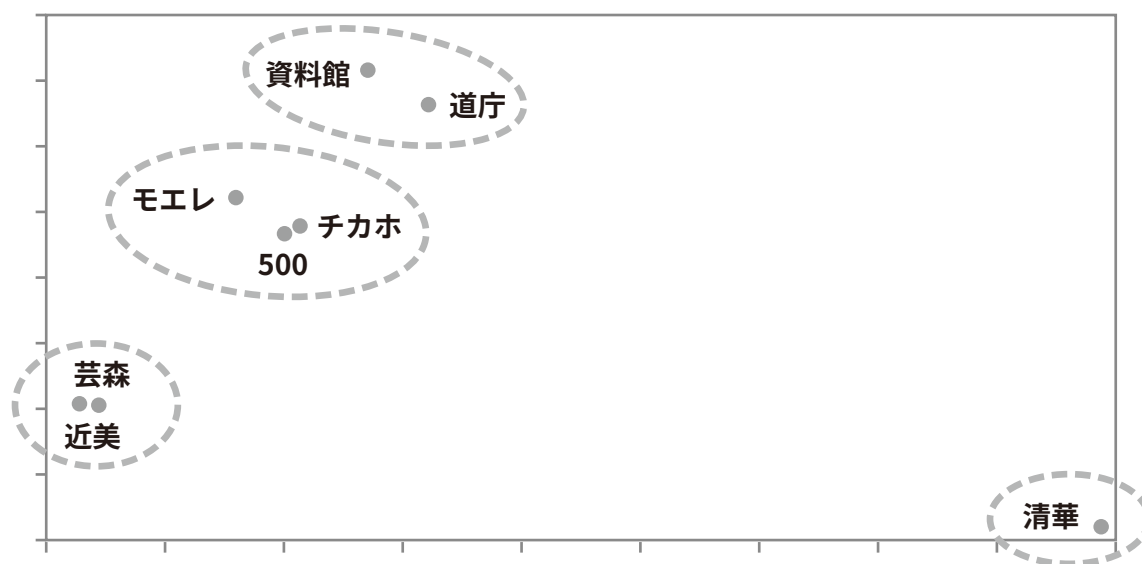
以上が、SIAF2014 事業評価のための調査結果の検証である。

数量化理論第Ⅲ類分析

さらにアンケートの再分析を行ったが、例えば設問12¹²では、各会場のうち、他にどの会場を訪問しているかを問う項目がある。当該質問項目についての回答結果を基に、来場者を、同時に訪問する会場別に分類することができるかどうかの検証を行った。結果、興味深い示唆を得ることができた。

具体的分析手法としては、上述問12についての回答データを基にいわゆる数量化理論第三類分析¹³を行った。分析結果としての統計的な詳細データの紹介は本編では割愛するが、分析結果の読み取り方として、グラフ上で示されている各点が会場を示しており、そして点(会場)同士のグラフ上での距離が、同時に訪問される傾向の高さを示している。例えば、【図表17】¹⁴では、資料館と道庁はグラフ上で近接しており、他方、資料館と近代美術館は遠くに位置している。これは、来場者のうち、資料館と道庁を同時に訪問する傾向が強く(同時に訪問する来場者が多く)、資料館と近代美術館を同時に訪問する傾向が少ない(同時に訪問する来場者は少ない)ことを示している。

図表 17 SIAF2014 同時に訪問する場所についてのアンケート結果(数量化第Ⅲ類分析)



12. 設問詳細：その他の設問については別冊資料参照のこと

『札幌国際芸術祭2014』は、ご覧の会場以外にも、様々な場所で作品が展示されています。

あなたは、どの会場をご覧になりましたか。(または、ご覧になる予定ですか。複数回答可)

- 1 北海道近代美術館 2 札幌芸術の森美術館 3 札幌大通地下ギャラリー(500m美術館)
- 4 モエレ沼公園(ガラスのピラミッド) 5 北海道庁赤れんが庁舎 6 札幌市資料館
- 7 札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ) 8 清華亭

13. 数量化理論第Ⅲ類分析とはカテゴリーデータに基づき、ケース及び変数の似通ったものをまとめ、傾向を見るために用いられる手法。アンケート質問に対する回答パターン等複数のデータの特徴から、サンプル相互の距離(似ている度合い)、カテゴリー(回答選択肢)相互の距離を得点化し、サンプルやカテゴリーの特性を分類して解釈することができる。

14. 図表内略号

資料館=札幌市資料館、道庁=北海道庁赤れんが庁舎、モエレ=モエレ沼公園、チカホ=札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)、500=札幌大通地下ギャラリー(500m美術館)、芸森=札幌芸術の森美術館、近美=北海道近代美術館、清華=清華亭

【図表 17】からいくつかの示唆が読み取れるが、第 1 に性質が近いエリアを同時に回る傾向があることが分かった。例えば観光客が多く訪れる札幌駅周辺地下街や観光地として人気が高いモエレ沼公園<モエレ～チカホ～500>、さらには歴史的建造物である<資料館～北海道庁>等である。例えば、<チカホ～500>とモエレ沼公園は距離的に遠いが、チカホ、500m美術館は地下街であり、同時に回りやすい。おそらく観光客がチカホを通り、500m美術館に行き、観光地として人気のモエレ沼公園まで足をのびしたのではないと思われる。また、特に地理的な距離としては遠いにもかかわらず<芸術の森～近代美術館>は美術館である両者の性質が近く、同時に回る傾向が見て取れる。この理由の一つとしては街中とモエレ沼公園間、近代美術館と芸術の森間のシャトルバスが走っていたこともあげられるだろう。また、展示エリアとして、独立し離れた位置にあった清華亭は、いずれの会場とも同時に回ったという傾向はない。

今後は他会場からの周遊を促す施策が必要だろう。特に互いに距離がある会場間の移動手段をより円滑化させ、なるべく多くの会場を回りやすくする必要がある、あるいはニーズ別に分析することで作品配置への工夫を行うことも必要である。

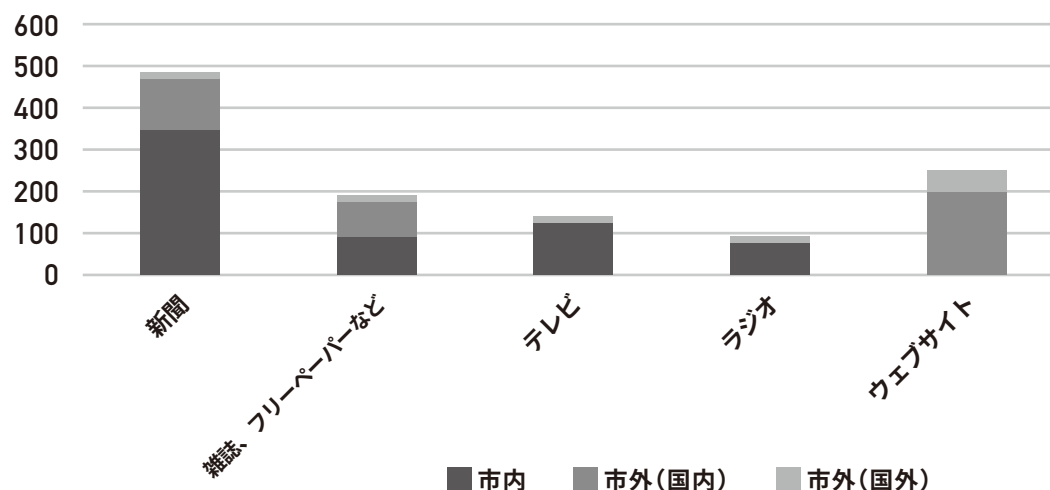
今回検証に利用したアンケートは、「どのような人が、どれくらい来て、どのような動機で来場したのか?」といった、イベントを通じた概観を把握するために設けられた設問だったため、SIAF2014 構想段階で前提とした仮説を余すことなく検証するには十分とは言えない。今後は、事前に十分なアンケートの設計や実施のための計画を策定することで、仮説検証をより充実させることが期待される。加えて、中長期的に成果を追跡する必要のある項目もあるため、十分な経験の蓄積には一定程度の継続性が必要である。

2.4.2. SIAF2014の受容について、メディア掲載実績から分析

今回はSIAF2014のPR業務に関しては実行委員会事務局、電通北海道、アートPR専門会社であるTAIRAMASAKO PRESS OFFICE、坂本龍一らがエイベックス・グループとともに設立したcommons(コモンズ)が連携して実施した。実行委員会事務局によって収集された掲載記事の傾向を分析したところ、メディア掲載は圧倒的に市内メディアが多い。また掲載記事の傾向としては、イベント告知、事業内容のレポートと告知を兼ねたものや、展示の批評等がある。掲載は圧倒的に実行委員会に参加する北海道新聞が多く、主にイベントの告知記事が掲載された。残念ながらアート専門誌等専門的なメディアへの露出は乏しく¹⁵、丁寧な戦略の再設計が必要であろう。(【図表18】参照)¹⁶

図表 18 「メディア掲載実績、メディア種類別」

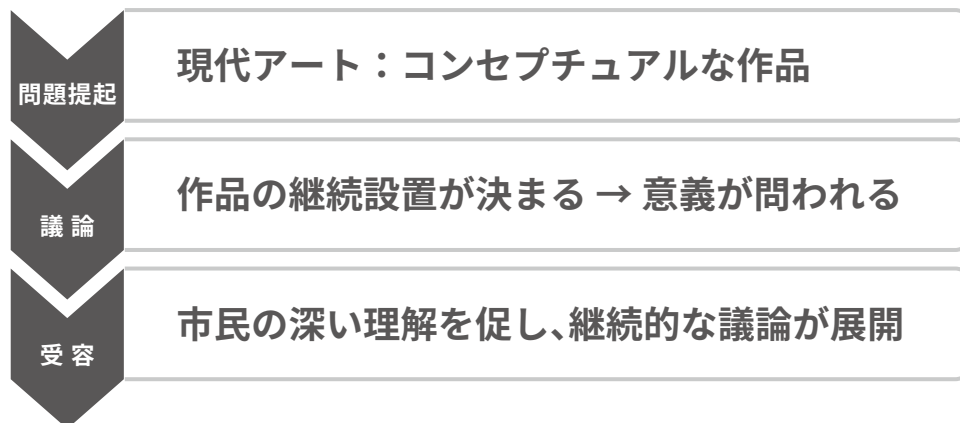
広報実績



15. メディアに不掲載で実行委員会事務局が独自に収集したアート関係者のコメント等に関しては『札幌国際芸術祭2014開催報告書』にて確認されたい。その他、報告書にはメディアに掲載されたアート関係者評も収録。

16. 開催後も含めた、各芸術祭の露出について論文検索システムCiNiiにて検索結果を参照してみる。これは芸術祭開催後の論考も含めることと、継続年数が長く歴史のある芸術祭は必然的に論文数が増える傾向はあるものの、今後の認知を高めるためには専門的な論考が多く発表されることも重要であると考え例示する。越後妻有アートトリエンナーレ：127件、横浜トリエンナーレ：90件、瀬戸内国際芸術祭：80件、あいちトリエンナーレ：45件、PARASOPHIA：2件、札幌国際芸術祭：2件(2015年8月現在)

図表 19 「作品の受容モデル：『一石を投じる』」



また、特定の作品が論争を呼び紙面に多く掲載されたケースもある。

例えば島袋道浩の『一石を投じる』と名付けられたコンセプチュアルな作品に関しては、北海道庁赤れんが庁舎前「札幌市北3条広場」に展示されることにより、日常生活に違和感を挿入した。同作品は会期中、会期後に様々な議論を巻き起こしたものの、概ね市民の理解を得て、SIAF2014にとってモニュメンタルな作品となった。結果的には市民の要望によって継続設置が決まった。発端は2014年9月28日に行われたファイナルトークでの市民からの声だ¹⁷。一方で継続設置については、この作品が現代アートなのかどうかの疑問の声や購入プロセスに対する疑問の声もあがった。その疑問の根底には、作品が芸術作品として理解しづらい、という考えもあったのだろう¹⁸。こうした物議を醸した作品を前に、札幌市資料館では「アートカフェ」という市民主体の勉強会が開催され、同作品についての議論が行われた。コンセプチュアルで、「一見して意味の分からない作品」がきっかけとなり、疑問を出発点とした理解や対話の場が生成していることは、現代アートが市民に対し、より深い文化的教養を与える可能性を秘めているとすることができるだろう。(【図表19】参照)

別冊資料 6 アート関係者の評(SIAF2014 実行委員会編：開催報告書より転載)

17. 別冊資料にファイナルトークでのコメントを収録。

18. 「エッ！これが“芸術品”?? 巨石を崇める人たちに『一石を投じる』、『クオリティ』2014年11月号、16-17頁、以下引用。

この作品は概ね市民から好意的に迎えられていたとの論調が多いが、継続設置が決まり購入プロセスへの疑問の声や、一部強い反発もあったようだ。市民からは「どこから見てもただの岩石。どこが芸術なのか」(中略)この岩石が芸術なのか、ただの石ころか。読者の判断は如何に一。

2.4.3. SIAF2014 ドキュメント出版記念イベント来場者 (市外のアートファン)へのアンケート調査結果の分析

これまで、新聞等による市内における反応について考察してきたが、一方で、アートファンや個人の反応も非常に重要である。特に市外の対象にどれだけSIAFが認知され、テーマが理解されているかを追跡調査することには一定の意義があるだろう。今回はあくまでもサンプルケースとして、2015年3月24日に東京の代官山蔦屋書店で実施された『人と自然が響きあう都市のかたち 札幌国際芸術祭2014 ドキュメント』の出版記念イベントにて、参加者25人に対し、アンケート調査を実施し、市外のアートファンがSIAF2014についてどう感じたかを分析する。

この調査を実施した際の仮定としては、会期終了後に企画されたイベントまで足をのばす客層は相当熱心なアートファンであり、SIAF2014にも足を運んだものだろうと想定していた。また、そういった熱心なアートファンにSIAFがどのように受け止められていたかの調査を実施した。(【図表20】参照)

図表 20 アンケートの主な質問項目



調査概要

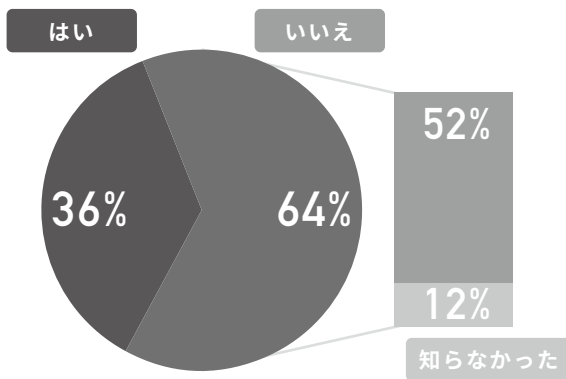
- 内 容・・・SIAF2014に参加したであろうアートファンの感想を調査
- 方 法・・・アンケート調査
- 対 象・・・イベント参加者
- 期 間・・・2015年3月24日
- 回答数・・・25

調査の結果、アーティストやキュレーターのトークを実施した同イベント参加者の6割がSIAF2014に足を運んでいなかったことが判明した。(【図表21】参照)

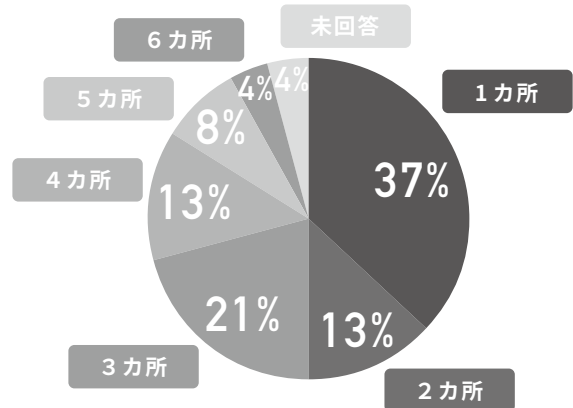
また、このアンケートでは、こうしたイベントへの参加者は、熱心なアートツーリストであり日本全国の芸術祭にも足を運んでいるだろうと想定し、具体的にはどの程度の頻度で芸術祭に訪れているかを調査した。

(【図表22】参照)

図表 21 SIAF2014 に行ったか



図表 22 芸術祭参加歴について



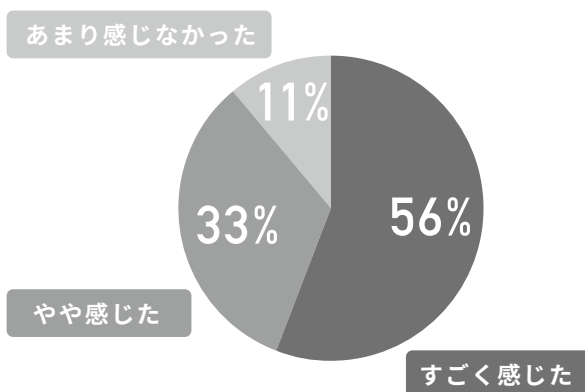
その結果、ほぼ全員が全国各地で開催されているいずれかの芸術祭に参加しており、複数回参加している人が6割程度いた。これだけ熱心なアートファンの6割以上がSIAF2014に参加していなかったのは残念なことである。またその不参加理由には、SIAFの存在自体を知らなかったというものもあった。つまり、市外のアートファンへの周知は十分ではなかった可能性がある。今回のアンケートはあくまでも市外のSIAF2014関連イベントにて実施したものであるため、十分ではないが、【2.3.2.】でもアート専門誌へのSIAF2014の露出は少なかったことがうかがえることから、より戦略的に国内のアートファンに向けた広報計画が必要であろうと言える。

また、北海道新聞等の道内メディアに触れる機会のない道外の観客にSIAFの内容が、どれだけ伝わっていたかについて質問した結果、残念ながら「都市と自然」というテーマに関しては「すごく感じた」との回答が過半数にとどまった。（【図表23】参照）

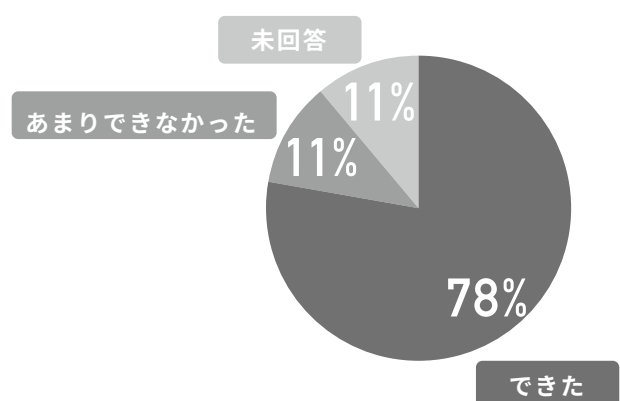
とはいえ、SIAFに参加したと回答した人は、札幌の新しい魅力を発見したかという問いに対して、8割近くが「発見できた」と答えており、SIAFのテーマの浸透は十分ではなかったものの、道外からSIAFに参加した人の札幌滞在中に何らかの札幌市の魅力が伝わったことは分かった。

このことから、観光として札幌市滞在自体は楽しんでもらえたものの、SIAFのテーマ等内容についての理解度はやや低いと考えられる。そのため、SIAF参加者へ対し、SIAF全体のコンテンツをより分かりやすく伝えるための工夫（例えば、会場の回り方のガイドの配置やインフォメーション機能といったインターフェイスの整備と広報、展示作品や活動内容の説明キャプション等の工夫）が必要であろう。（【図表24】参照）

図表 23 都市と自然のテーマを感じたか



図表 24 札幌の新しい魅力を発見したか



3. 芸術祭としての評価軸

国内外において多数の芸術祭が開催される中で、SIAFが今後トリエンナーレとして継続され、発展していくためには、SIAF独自の特徴、強みが必要である。本章では、SIAFの今後の方向性、数多い芸術祭の中における位置づけを検討するにあたり必要となる3つの視点を提示する。

3.1. 芸術祭の歴史的変遷とSIAF

—2000年代の芸術祭の変容—最先端の芸術の提供から市民参加へ—

本項では、SIAFの独自性を考察するために必要な前提として、日本国内での国際芸術祭の歴史についてまずは確認する。特に国際芸術祭や地域アートプロジェクトがブームを迎える現在に至るまでの道筋を追う。

1990年代後半頃から、芸術祭と呼ばれるアートイベントが日本各地で開催されてきた。それらを国際展に分類すればその歴史は古く、ヴェネツィアビエンナーレ、ドクメンタ、ミュンスター彫刻プロジェクト、サンパウロビエンナーレ等が有名だ。だが、今日、日本で開催されている芸術祭と呼ばれるイベントを見渡してみると、それらの規模は大小様々で、必ずしも表彰制度があるわけでもないようだ。それぞれの芸術祭の開催趣旨を見ると、とりわけ目立つのが、「地域活性化」や「市民参加」といった文言である。SIAFも創造都市政策を背景に持ち、実施されたこともあり、当然「地域活性化」「市民参加」を前提としているため、こうした流れの中に位置づけられることは当然である。

日本は、かねてから「過疎」「人口減少」「近隣同士のコミュニケーションの希薄化」等の地域課題が叫ばれてきた。その中で芸術は、いわゆる地域活性化の起爆剤となることを期待される側面が散見される。行政主体の事業の場合、市民への還元は最大のミッションではあるものの、現代アートの先端的な例を各国ごとに見本市のように展示する海外で開催される国際芸術祭とは異なったものとして、日本の芸術祭が地域との連携を殊更重視するようになった背景にはどのような経緯があったのか。札幌は新しい芸術祭として、これまでの流れを引き受けながら、今後の方向性を決めるために、まずは先行事例について踏まえることとする。

まず、芸術が地域課題に対し期待を向けられるようになった事例として、2000年にスタートした「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ(以下、「越後妻有」という)」があげられる。発足の裏側では、2,000回を超える会議や住民説明会を経て開催に至ったことが報告されている。¹⁹ アーティストはもちろん、「こへび隊」と名付けられたボランティアの活躍及び市民との協働があり、国際的に著名なアーティストの作品を人口7万8千人²⁰程度の山村地域に「誘致」することで、芸術祭は、初回の開催で16万人を超える鑑賞者を動員し、「観光」という文化資源を引き立て、地域課題に対して具体的な策を講じることに成功した。こちらはよく「里山型」芸術祭と評されるが、国際性を保ちながらも地域密着型の成功例としてあげられる事が多い。

一方、横浜では、「横浜トリエンナーレ」が発足していた。初回の開催となった2001年は、パシフィコ横浜展示ホールや横浜赤レンガ第一倉庫をメイン会場として開催され、開催意図には、「日本からの文化発信」や、難解なイメージが強い現代アートへのイメージを取り払い「市民参加」を促す目的があった。世界的に有名なアーティストの作品を一堂に紹介したことと同時に、椿昇による「巨大なバツタ」等、屋外に登場した作品は多くの鑑賞者にインパクトを与えた。1年先延ばしで2005年に開催した第2回展では、川俣正をディレクターに迎え、「アートサーカス」というコンセプトにより非日常的な空間が創出された。初回の完成形の展示を提示する様子とは大きく異なり、ディレクターの「ワーク・イン・プログレス」という、準備中の作品を展示し、期間中に制作の進行状況を公開するという考えの下、日々運動体として変化する独特の「国際展」となった。²¹ 人々の参加を重視する同コンセプトは、「はまことり」と呼ばれる大勢のボランティアを動員することにもつながった。

19. 北川フラム『地域づくりのサポートアートは場所と人、人と人をつなぐ』日本労働研究雑誌

20. 暮沢剛巳・難波祐子『ビエンナーレの現在』青弓社、2008年47頁

3回目の開催年度である2008年を迎える頃には、「黄金町バザール」が発足し、黄金町及び日ノ出町界隈の違法飲食店の排除という地域課題に文化・芸術が役割を担った。さらに、同年、みなとみらいエリアだけではなく、郊外エリアにも芸術・文化の拠点を形成する目的で、地域サポート事業「ヨコハマアートサイト」が発足した。以降、横浜には、郊外エリアも含め毎年多数の芸術祭やアートプロジェクトが発足し、毎年多種多様なプロジェクトが実施されている。横浜の事例は都市型の芸術祭として、高く国際性を保ちながらも、地域密着型、市民参加を重要視した実践事例として、SIAFが学ぶことが多いと言えるだろう。

地域を舞台にした芸術祭や芸術・文化事業の発端は新潟・横浜に限った話ではない。1999年、既に茨城県取手市では、東京藝術大学先端芸術表現科の設立を契機に「取手アートプロジェクト」の前身である「リ・サイクリングプロジェクト」が発足しているし、²² 2002年には、「アサヒ・アート・フェスティバル」が発足している。地域で開催される芸術祭やアートプロジェクトが増加する中では、学生が授業のカリキュラムの一環として参加したり、作家のアシスタントや事務局の運営として地域に入る事例も少なくない。そこには、2003年の「特色ある大学教育支援プログラム」の開始も影響しているかもしれない。さらに、参加する学生は、美術大学の学生ばかりでなく、社会学系の専攻を取る学生が増加している。また、2008年には、「越後妻有」が開催される新潟県の新潟市内をメインエリアとした「水と土の芸術祭」が、2009年には、東京で「東京文化発信プロジェクト」が、2010年には「瀬戸内国際芸術祭」がスタートした。さまざまなプロジェクトが同時多発的に立ち上がる中、3年に1度、ないしは2年に1度の開催をうたう芸術祭は、着実に実施回数を増やし、多数のボランティアやサポーターとともに地域との連携を強めていくことになる。

2010年には、都市型芸術祭である「あいちトリエンナーレ」が発足し、作品展示のみならず、音楽、舞台を柱として設定し開催された。主な開催エリアとなった名古屋市内文化施設以外にも、地元の商店街を活用した地域連携の在り方は、作品が設置される場の必然性を問う上でも重要であり、行政側の希望にも配慮しつつ成功を収めたと言える評価されている。^{23 24 25 26}

このように、90年代後半から各地で実施され、国内各所に広がっていった芸術祭は、「地域活性化」や「市民参加」等様々なキーワードを汲み取りながら開催されている。今日に至る芸術祭の変遷の中では、国際的な文脈においても、最先端の芸術表現に触れる機会を市民に提供することから、市民自身が当事者として参加することに鑑賞者の立ち位置が変化した。日本国内では芸術祭が開催される舞台を、展覧会会場から里山や商店街等の市民の生活圏内に拡張させることで、観光や地域の特色の発見等の文化資源の創出につながり、結果的にそれが地域振興の一翼を担うことになった経緯が見られる。地域との連携を図る上では、サイトスペシフィックな作品(ある特定の場所に設置されることを前提とする作品)との相性の良さも拍車をかけていたかもしれない。いずれにせよ、今日では、先例の経験を活かしつつ、国際展であれ芸術祭であれ²⁷、「地域との連携」や「市民参加」は一つの見どころとして用意されているようだ。SIAFはこうした中で、市民の日常生活の中での創造性の向上を目指す上で、より国際的な芸術祭を目指すのか、市民参加を核とした地域密着型を目指すのか等、どのような立ち位置を取るべきか、検討するための視座を次項以降で提供する。

別冊資料 8 国際展年表

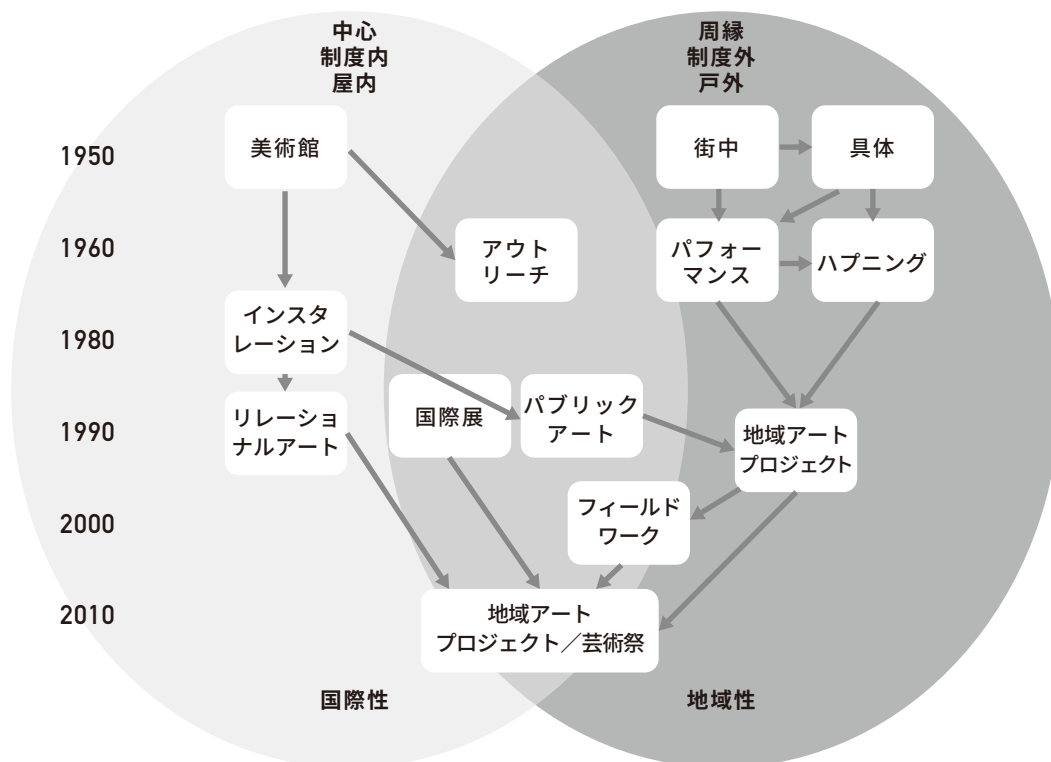
21. 暮沢剛巳『4年ぶりの開演！現代美術の縁日』美術手帖2005年11月(872)、180-181頁
22. 1994年の時点では、既に茨城県守谷市にてアークスプロジェクトが発足し、翌年にはアーティスト・イン・レジデンスが、98年には山口県で「秋吉台国際芸術村」でレジデンス事業が発足している。
23. 窪田研二『国内最大級の国際展が目指したものは』美術手帖2010年10月(944)、116-118頁
24. 大野明彦によると、「総入場者数は57万2千人と当初想定していた30万人を大きく超えて、盛況の内に閉幕した」ことや「ほとんどの回でチケットが完売し、キャンセル待ちの行列が恒例の風景となった」ことが報告されている。
(『「あいちトリエンナーレ2010」の実施とその成果検証(中間とりまとめ)について』文化経済学第8巻1号2011年(30)、109-111頁)
25. ただし、この成功の裏には、国内外のアーティストに精通したキュレーター陣による作家選定のバランス感覚の良さがあったことを先に述べている。
26. 春日和俊、伊藤孝紀、堀越哲美『アートイベントにおける都市部の地区演出の可能性 あいちトリエンナーレ2010長者町会場を事例とする』によると、「都市部の中にある一定の地区全体を活用することで、一般市民にアートを身近に感じてもらうとともに、アート作品で演出された地区全体を回遊することは、会場となった地区全体の活性化にも大きく寄与すると考えられる。」と言っている。日本建築学会計画系論文集第77巻第681号、2577頁
27. 国際展あるいは国際芸術祭は一定数以上海外作家を招聘し、国際的に評価される芸術の紹介、すなわち国際性の高い芸術祭の実現を目的の一つとするもの。いわゆる芸術祭は必ずしも国際性の高さを重視しておらず、国内の作家のみの参加のものや、市民文化祭のようなものも含む。

3.2. 芸術表現形式の「制度内／制度外」における変遷

既に述べたように、国際芸術祭(国際展)は海外から輸出される形で日本に入り、独自の発展を遂げてきた。本項では、SIAFの独自性を考察するために必要な前提を確認する。

具体的には、1950年代から半世紀以上にわたり、日本国内での芸術表現の形式の変遷の中で、昨今の国際芸術祭やアートプロジェクトの盛り上がりをどのように位置づけられるかを検討する。ここでは検証作業を注視するため、日本の現代アートで流行した芸術の形式を網羅的には取り上げることせず、特に地域アートプロジェクトや国際芸術祭を理解するために主に2つの軸に分類した。分類の際には、文化人類学者である山口昌男氏による中心と周縁という概念を援用しモデル図を作成した。²⁸(【図表 25】参照)以下、この図の流れを解説する。

図表 25 日本における国際芸術祭ブームまでの流れ



まず、1950年代から概観すると、当時現代アートの発表の場は美術館を離れ、街の中に出ようとしていた。²⁹これを村田真氏の言葉を借りれば「脱美術館化」ということができるだろう。当初は美術館という制度に対する批判は強くはなく、空間としての興味が美術館という屋内から屋外での展示に移り、パブリックアートの先駆である野外彫刻が人気になった。³⁰それが、次第に美術館等の制度を批評するものへと変化していった。そうした中で美術館等のホワイトキューブ空間での展示と、美術館外での作品展示に止まらないパフォーマンスやハプニングといったアーティストの活動自体を提示するものへと表現が二極化していくこととなる。その先駆的なものとしては具体等が挙げられる。このように、現代アートの表現は次第に従来の美術の制度に対して、批評性を高めていった。

このように美術の制作あるいは発表の場として、制度内/制度外という二軸が成立する一方で、1980年代からは制度の側にある美術館も、活動を館外に伝えるアウトリーチ活動に力を入れるようになる。³¹

この活動は、空間的に美術館外に出たとはいえ、性質としては美術館という枠組みの中にあるため、この二軸の中間的な位置にある。この後1990年代には国際展という形式が日本に輸入されるが、ここでは美術の領域での正統的な表現、つまりは美術館での展示も行うような作家が、美術館外でのインスタレーション等を行っており、この二軸の中間的、あるいはそれを乗り越えた新しい作品発表の場が生まれたといえる。

この頃にはスターキュレーターと言われる、国際展を得意とし各国を渡り歩くようなキュレーターも登場し、現代アートのシーンは新しい場を得て活発化していたといえる。

さらに1990年代には海外からパブリックアート概念が輸入され、それまでの屋外彫刻とは一線を画していった。³² こうした現代アートは展示空間として制度外に出るのと同時に、作品が社会化し、その内容も現代社会への鋭い批評性を持つようになっていった。そのためこの時期からその批判の対象も制作の場や環境の変化に準じて大きく変化してきた。こうして美術館外での作品発表が活発に行われていく中で、アートプロジェクトと呼ばれる形式が生まれた。この形式についてはいくつかの定義があるが、概ね地域社会の中で展開する市民参加を促し、プロセスを重視するものである。言い換えれば空間的広がり、人的広がりがあり、必ずしも物理的な作品を残さないアートのスタイルである。この形式は地域コミュニティに密接に関わり、作用しながら展開するため、昨今では地域振興の一つの施策となりうると注目を集めつつある。また、日本では国際芸術祭がこうしたアートプロジェクトと連動し、前項で述べたように、地域振興を促進するものになりうると注目されつつある。地域アートプロジェクトを実施する際には、丁寧に地域住民と関係性を築く必要があるため、フィールドワーク(現地調査)を実施しながら作品を制作する作家も増えている。

このようにして、ある意味で制度や権力から離れ、批判的な性質を有することを目的としてきた芸術祭が再度、行政組織等の制度と出会い、新たに関係性を結ぶことを始めたといえるであろう。芸術の一つの形式として展開した制度内と制度外の対立は、国際芸術祭へ引き継がれた国際性を持つ正統的な現代アートの表現の探求という方向性と、アートプロジェクトに代表される地域性をはらむ市民参加型の芸術表現を探求するという方向性の2つの軸を持つこととなった。こうした2つの軸の中でどのようにバランスを取り、特徴を押し出していくべきか次項で検討する。

28. 芸術における中心と周縁理論の援用については以下のリンクを参照した。Artscape アートワーズ「中心と周縁」なお、山口は北海道出身で札幌大学学長も務めた。彼の理論をSIAFの理解に援用するのは、不思議な引き合わせと言えよう。
(<http://artscape.jp/artword/index.php/中心と周縁>)

29. 村田真「『脱美術館』化するアートプロジェクト」『社会とアートのえんむすび1996-2000』ドキュメント2000プロジェクト実行委員会、2001年、8-20頁

30. 『日本型アートプロジェクトの歴史と現在』第1章 http://www.tarl.jp/cat_output/cat_output_art/869.html

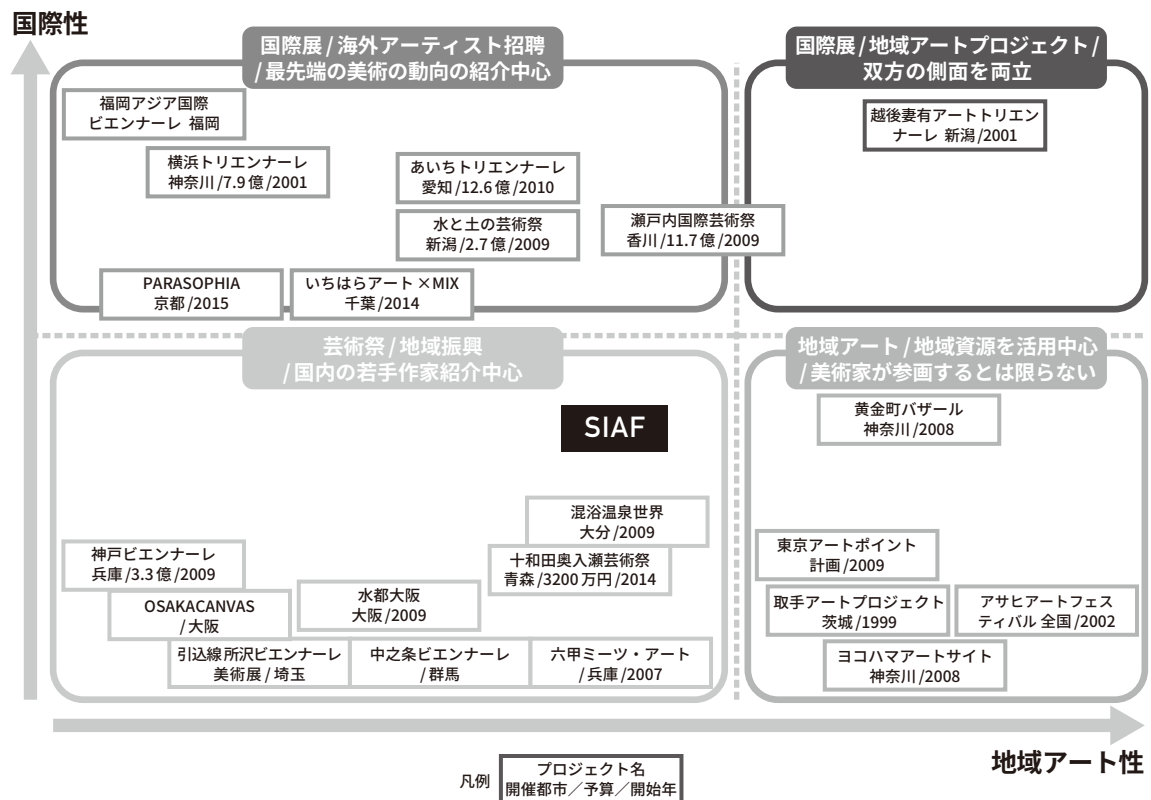
31. 津村卓、「制作基礎知識シリーズVol.32 演劇アウトリーチの基礎知識①公立文化施設のアウトリーチ事業講師」『地域創造レター』1月号、2009年(<http://www.jafra.or.jp/j/library/letter/177/series.php>)

32. 村田真、「3. 美術館を出て-パブリックアートについて(2)」『美術の基礎問題 連載第21回(最終回)』アーツスケープ/artscape (<http://www.dnp.co.jp/artscape/series/0203/murata.html>)

3.3. 日本の国際芸術祭の2傾向「国際性／地域性」について

SIAFの特徴を捉えるために、昨今の地域における芸術祭や地域アートプロジェクトを大きく分類し、それぞれの特徴が「国際性」あるいは「地域性」のどちらを重視しているかをマッピングし、SIAFの位置付けがどこにあるかを検討する。このモデル図は縦軸の国際性に関しては、海外からの招聘作家数に基づく。横軸の地域性に関しては一つの尺度で検討するのは困難であったため、何ををもってして地域性が高いかを判断するのに5つの点から評価した。まずは継続年数(5年以上続いているか)、芸術祭前後にできた文化拠点の有無(大小問わず)、関連する地域団体主催イベントの有無、派生関連企画の有無、地元企業の協賛協力の有無である。(【図表26】参照)

図表 26 国内芸術祭・アートプロジェクトの相関図



こうしてマッピングしてみると、概して予算規模の大きいものは国際性が高く、小さいものは地域密着型を選択していることがうかがえる。³³

SIAFは背景に創造都市さっぽろの施策があり、地域振興と国際的な競争力の獲得が当初から志向されていた。しかしながら、一足飛びの実現は困難であり、まずは何を重点事業にするのかを検討する必要がある。そのために、ここでは専門家の発言を、分析や示唆を含むコメントとして本稿に掲載するに至った。

33. 今回、各芸術祭やアートプロジェクトについて調査したが、残念ながら様々な数値が公表されていないものもあり、このモデル図の一部は厳密なものではなく、手に入った資料に基づいた仮説となっている。

2015年7月4日(土)に札幌資料館で行われた「SIAFパブリックミーティング」³⁴では、事業評価の中間報告が実施された。ここでは芸術祭の特徴を把握するために有識者として暮沢剛巳氏(美術評論家・東京工科大学准教授)と天野太郎氏(横浜市民ギャラリーあざみ野首席学芸員/プログラム・ディレクター[横浜トリエンナーレ2005キュレーター、2011・2014キュレトリアル・ヘッド])を招聘した。両者にこの2つの視点から、SIAF2014をどう見るか伺ったが、その意見を一部提示する。

天野氏：

公立美術館、博物館の危機といわれる昨今、それを賄う岩として、芸術祭は観光資源として有効だと思っています。東京に次ぐ人口を抱える横浜も、高齢化は深刻な問題で、近い将来深刻な税収減が避けられない状況です。税収によって支えられる公立美術館の人間の立場からすると、「美術館の危機」という問題が前提としてあります。税収を失った美術館は今後、どう生き残っていくかどうかの瀬戸際をさまようことになります。収蔵品を収蔵していくことも難しく、それを維持するためにも新しいスキームが必要です。その中で、美術館としては、合わせ技として芸術祭をどう捉えるかは重要な課題と考えます。例えば、APT(アジア・パシフィック・トリエンナーレ)は、オーストラリアのブリスベンにあるクイーンズランド・アートギャラリー(公立美術館)で3年に1回開催されている国際展ですが、幾つかの出品作品は展覧会終了後に同館のコレクションになります。それは今では有数のアジア現代美術のコレクションとなっており、その数は増え続け、美術館も倍の面積になっている事例があります。大胆なことではありますが、札幌の場合は、芸術の森や道近美に寄贈することになるのでしょうか。

その上で、芸術祭を開催することが、地域の死活問題のソリューションに繋がるものにならないといけないと思います。なんのために国際展をするのかということを考える上では、文化的なインフラを作ることも同時に考える必要があります。地域の再構築していくにはどうするかということも含めて検討をし、本当に地域を再生することを目的にするのかということや、作品を美術館の収蔵品として残すのか、それとも地域に残すのかということも考えていく必要があります。

今、芸術祭はバブルになっています。こうした競争の中で生き残りをかけるにはどうするかを考える必要があるでしょう。例えば、横浜の黄金町バザールの例では町に課題があり、その解決のためにアートを含めて文化を活用するという実践がされています。一方で札幌の課題意識はまだ危機感が薄いように思います。今後はコンパクトシティになっていくことを前提として戦略を考える必要があるでしょう。

暮沢氏：

全体にコンセプトチュアル(概念的・禁欲的)で派手でない作品が多く、芸術監督の坂本龍一さんの指向や好みが出ていた。その点では統一感もあった。弱いなと感じたのは、地域やコミュニティ等の問題があまり反映されていなかった点だ。**越後妻有アートトリエンナーレ等近年成功している芸術祭では、作家が地域に入り過疎等の問題と向き合い制作するのがひとつのスタイルになっている。札幌ではそうした部分が少なく、地元の人との連帯感が薄くやや盛り上がり欠けたようにも感じた、芸術祭はどうしてもそれがもたらす効果の方に目が行きがちで動員数等分かりやすい指標になるが、もっと展示の質に注目するべきだ。今回は、テーマに合った作品の水準を保ち、それなりに評価できる内容だと思う。**³⁵

34. SIAF「パブリックミーティング」は、札幌らしい芸術祭を実現していくために、「市民1人ひとりにとっての札幌」を様々な角度から考え、発見、発信していくプロジェクトである「SIAFラボ」のキックオフイベントとして実施された。7月4日と5日の2日間、ワークショップやトークセッション、シンポジウム等のプログラムが行われ、その一環として検証会の活動の中間報告も実施された。

35. ここまで朝日新聞(2014年10月4日付)再録、以下パブリックミーティングでのコメント。

提案として、継続する上では、恒久設置の作品があってもいいのではと思います。記憶のトリガーとして残される作品があってもいいのではないかと思いました。しかし、それは諸刃の剣で、野外彫刻が増えてしまう、インスタレーション、メディアの作品が出て来づらくなるので、多様性を考えると、慎重になるべきです。例えば、札幌で有名な「さっぽろ雪まつり」は、会期後は作品がなくなってしまうわけですから、そのように、作品は残りはしないけれども、語り継がれる部分があってもいいという考え方もあります。

国際展について検討するとき、都市型、非都市型(地方型[里山型])という分類があると思います。都市型の札幌のメリットとしては、作品を公共交通で見て回れる点だと思えます。札幌国際芸術祭に関しては、やはり地域やコミュニティの問題への掘り下げが少し足りないのではという感想を持ちました。

公立の美術館博物館を芸術祭の会場として活用する中では、美術館の資源を活用することも可能な分、県と市の関係にも調整が必要です。

20世紀、日本でも国際展をやらねば！という気運により、数多くの国際展が開催される中で、今大型といわれる国際展は北川フラム氏がいくつかディレクターを兼務しており、参加するアーティスト等も重なる傾向があります。人口7万人程の里山の集落に芸術祭を誘致し、多くの観客を集めたこと、「越後妻有」は成功とされていますが、そのため、ここ数年、「越後妻有」の成功例を真似したいところが増加しています。その上では、どうやって国際展を差異化するのかという問題があります。

国際芸術祭は海外からの作家が出品し、お客さんが海外から来ているからそう言えるのではないのでしょうか。札幌は国際都市だし、そこに海外から多くの作家が参加し、お客さんが来るわけだから、札幌国際芸術祭も国際芸術祭としての条件は満たしているわけです。いっそのこと、^{ドメスティック}「国内芸術祭」と言ってみてはどうでしょうか。もちろん、参加作家もお客さんも国内限定。国際芸術祭をうたうイベントが多くある中、かえって異彩を放つかも知れませんよ。さすがにそれは冗談ですが、国際芸術祭というのは万国博覧会、見本市のアート版という側面がいまだに強いので、違う方向性を目指してみるのはいらないかと思えます。

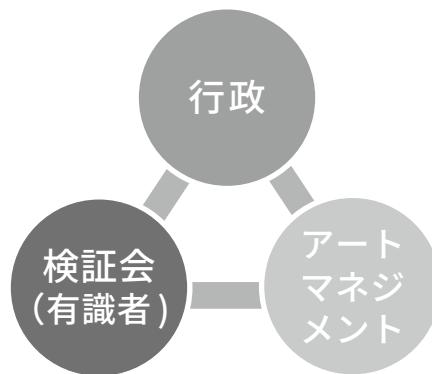
このように専門家の2名からは、SIAFの国際性は一定の評価がされたと言える。一方で、地域性に関しては弱いとの意見をいただいた。そのため、今後は国際芸術祭としてのクオリティを保ちつつ、同時に地域性を高めるためには札幌市民へのアプローチを丁寧に行う必要があるといえるだろう。

4. SIAF2014 事業評価検証会からの提案

4.1. 事業評価のための体制作り

今回の事業評価では、外部有識者からなる検証会が、SIAFの事務局として機能した行政機関である札幌市職員と、現場のマネジメントを実施したアートマネジメントチームに対しヒアリングを実施し、事業評価に活用できるデータを調査、選別しながら、追跡調査や事業評価のためのロジックモデルの作成等を実施してきた。
〔図表27〕参照

図表 27 検証会の位置づけ



このように、現場を支えてきた事務局が外部有識者による検証会に協力する関係を結び、丁寧に情報を提供して事業評価を行うことは珍しい。越後妻有の報告書等の一部例外を除き、大半の芸術祭の報告書はアンケート結果の単純集計や広報効果、経済効果等のデータを羅列したものは存在するものの、そのデータを事前に作成した評価軸を基に仮説検証し、丁寧な分析をしたものはない。

今後は内部関係者が問題意識を持ち、事業評価のための準備を実施していくことが肝要だ。一方で今回の調査は芸術祭終了後に実施が決定し、当初から本報告書に収録されているような分析の実施が計画されていたわけではない。そのため、どうしても仮説検証という形ではなく、事後的な調査検証になったが、既にある資料の再分析と開催地域で芸術祭に主体的に関わった人々に対する追加調査によって、SIAF2014の実践で実施されたことを評価しようと試みた。

SIAFに主体的に関わった関係者に対しては、事業の定着度と関係者の変化を追うためにこれからも継続的な調査が望まれる。

調査は開催地域である札幌市で編成したチームで実施したが、そのことが今回の調査の特徴となっている。つまり、調査設計は外部有識者の知見に基づくものの、芸術祭が実施された場所に実行委員会事務局関係者も含む調査チームを編成したことにより、外部調査チームに委ねる形式の一般的な事業調査とは質的に異なるものとなった。札幌市民であり、文化芸術活動になんらかの形で関わる人員による調査は、外部調査でありながらも、関係性が築きやすく、より本音を引き出しやすくなる。そのため、今回の調査では次回開催に向けた事業改善のための提案も多く、関わった人の主体性が高まっていることが強く感じられた。

一方で、近しい立場の者からのヒアリングには、発言しづらいこともあるだろう。調査チームとの距離感をどう設定するかは課題ではあるが、内部調査と外部調査の中間的な性質であるからこそ実態が明らかになったこともある。

4.2. 事業評価のための実施段階別調査設計

芸術祭を評価する一般的な手法が存在するか否かについては議論の余地があるものの、芸術祭の事業を評価するに当たって、美術館の事業評価をする上で用いられてきた基本的な考え方は援用が可能ではないだろうか。

特に、事業実施段階に応じて、調査項目を整理し、それぞれに適した手法を採用するという考え方が重要である。段階としては構想時、準備時、実施中、実施後がある。

今回は事業実施中に行ったアンケート等をベースにしつつ、事後的にアンケートやヒアリングを実施した。本来は事業を進める企画段階でその価値を検証するための評価軸を事前に設定し、事業実施のタイミングごとに調査を実施するのが望ましい。

特に北米で発達してきたミュージアムにおける事業評価(その中には当然美術館での事業評価も含まれる)の中心となるのが「形成的評価(formative evaluation)」と「総合的評価(summative evaluation)」である。前者は事業の企画段階から、展示の一部のモックアップ等を想定される来場者数人のグループに体験してもらい、インタビューを実施する。そのうえで彼/彼女らの意見を参考に、事前に改善を試みるものである。後者は、事業終了後に事業が目標を達成していたかどうかを、総合的な観点から検証するというものである。事後的な調査は、事業全体を評価するという観点から「人」「金」「時間」といったあらゆるコストがかかるため、それらを事業規模に応じて、形成的評価を選択し、事業予算のなかでバランスを図ることが重要である。その上で調査を設計するのであれば、企画の段階から対象を絞り、形成的評価を実施することで最終的なコストの低減を図ることが理想的である。その手法の一つとしては、「フォーカスグループインタビュー」³⁶という手法を用いるのが有効である。例えば芸術祭であれば、企画段階で来場者として想定される(もしくはその回ごとに訴求を意図する)いくつかの観客者層を想定した上で、参加者を募りインタビューを実施するというものである。事業実施期間中であれば従来通りのアンケート調査とともに、出口調査等を実施した上で、各来場者層に必要な人数にヒアリングを実施(依頼)するのも有効であろう。

また今回実施したような関係者ヒアリング等の質的調査に関しては、その効果をより汎用性の高いデータとして共有するために、「テキストマイニング」³⁷的な手法を用いることも有効かもしれない。その一例として、インタビューの事前に発話が想定される単語単位での出現ワードのコーディングを実施しておくという方法がある。例えば、事前に複数の評価軸を設定し、その評価軸に応じてインタビュー内で発話されると想定される単語を分類し、+/-の指標を設定しておく、その軸ごとにワードとプラスマイナスの指標を付帯させておく。すると、インタビュー後に、インタビュー結果を文字起こしし、発話されたワードをカウントすることで、インタビュー内容を複数の評価軸に応じて定量的なデータへと変換することも可能である。

36. フォーカスグループインタビューとは定性的調査手法の一種であり、あるテーマについて対象となる集団を事前に設定したうえで行われるインタビュー手法。司会者と複数のインタビューイの間で対話形式で進められる。

37. 通常の文章からなるデータを単語や文節で区切り、それらの出現の頻度や共出現の相関、出現傾向、時系列等を解析することで有用な情報を取り出す、テキストデータの分析方法である。

4.3. アンケートの再提案

本項では、事業実施中に会場で実施したアンケートの改善を提案する。別冊資料のようにアンケートの言葉を答えやすく調整するとともに、質問紙によるアンケート調査の欠点を補うために、会場に必要な来場者層に応じてヒアリングの調査に協力を求めるといった手法を考慮する必要もあるだろう。アンケート用紙では要求可能な質問数及び回答範囲に制限がかかるため、来場者の感想や考え方をより深く知るためには、事業評価の役割も担うボランティアによるヒアリングの実施を提案する。また、アンケートの実施に際しても、個人情報の保護については十分に配慮しながら、事後調査の可否を尋ねる項目を追加し、事後調査を実施できるよう、アンケート調査の設計の段階から体制を整えておくことも一案である。このような設計をしておけば、芸術祭参加者の事後的な変化を追跡する調査実施の余地を残すこともでき、より多角的な視点から事業評価を実施することが可能になるだろう。例えば表を用いて、事業評価を設計し、丁寧に実施していくことが重要である。
 (【図表28】参照)

図表 28 事業実施段階ごとの、事業評価手法策定のためのモデル図

指標	評価手法			評価段階				優先度	特記事項
	アンケート	インタビュー	DTR*/その他	計画段階	製作段階	開催中	開催後		
札幌ローカルの特徴	○	○		○	○	○	○	B	作品へ反映されているか、伝わるか
既存資源の有機的連環	○	○		○	○	○	○	B	長期的な調査が必要
日常における創造性の構築	○	○		○	○	○	○	A	伝わるか
作品に触れる	○	○	参加者カウント			○	○	A	回遊度などもカウント
観た人が変化	○	○				○	○	A	長期的な調査が必要
周囲が変化	○	○				○	○	B	質的調査
主体性の向上	○	○			○	○	○	A	質的調査
札幌の新たな魅力が発信	○		データ収集				○	C	札幌市データの参照・合同調査の可否検討
新産業が創出される			データ収集				○	C	札幌市データの参照・合同調査の可否検討

*DTR= デスクトップリサーチ

この表は【図表3】のロジックモデルに基づき、各評価のための指標の実現度を測るために、どの段階で何をすべきかを検討するためのワークシートを初期段階で埋めたものである。

以上のように、事業評価を適正に実施するためには、情報を適時整理しながら、調査を設計する必要がある。ここでの提案はSIAF2014をベースに仮説として提示したものであるが、ここで提示した図表はSIAF次回開催時及び他芸術祭でも必要に応じてアレンジしながら活用可能なものである。

5. SIAF2014 事業評価の統括

5.1. 調査の継続の重要性

前章までの調査分析を踏まえて、本章では検証会の評価報告書の統括に当たり、調査の継続性の重要性について、ロジックモデルやこれまでの章のデータを踏まえつつ、新たに「文化事業における評価のあり方とジレンマ」「自然の生態系から学ぶ循環の仕組み」「基本方針『都市と自然』の持続可能性のための評価」「評価の工程がビルド・イン(組込)された3年サイクルの循環」の4つの観点から SIAF2017 に向けた提案を述べる。

5.1.1. 文化事業における評価のあり方とジレンマ

近年、国や地方自治体では、公共政策に評価を導入することが求められている。この潮流は、2000年代に地方自治体を対象として予算の無駄を明らかにするために始まり、2009年の国の予算編成に取り入れられた、いわゆる「事業仕分け」と称される行政刷新会議によって急速に広がった。文化振興に関わる施策や事業も仕分けの対象となり、その必要性、合理性、効率性に厳しい眼差しが注がれることになった。

事業仕分け以降、国や地方自治体による文化事業の評価のあり方に関心が集まっており、本報告書で取り上げているような国際芸術祭だけでなく、文化施設の管理運営、文化・芸術活動に対する助成事業等、形態、内容、受益者、経済的対価等が異なっている施策や事業に対し、何らかの指標を定めて評価することが、行政内部で初期設定化されていることが多い。

こうした評価の取り組みが、行政のアカウントビリティ(説明責任)として必要であることは自明となっている。しかし、文化事業の評価を巡っては、来場者数、事業収支、経済波及効果といった、言わばコストパフォーマンスや経済合理性を前提とした評価指標だけでは、成果や効果の測定が困難である。また、目的や内容が異なっている施策や事業に対して一律の評価指標を設定することは、評価することが文化事業の目的そのものを変質させてしまう可能性もある。

さらに、本報告書で取り上げる SIAF のように、同時代の先端的な表現を取り扱う文化事業において、そこでの作品や表現活動が重要な評価対象であることは自明である。だが、表現が先端的であるが故に、既存の評価軸や評価指標といった枠組みを当てはめることが難しく、仮に既存の枠組みで評価しようとする場合、同時代性や先端性を無価値化し、作品や表現活動だけでなく、芸術祭の存在意義すらも否定しかねないだろう。

こうしたジレンマを常に抱えながら、文化事業の評価は必要に迫られている。逆に言えば、それらのジレンマをバネとしながら、従来の文化事業の評価方法を更新するための試行錯誤が続いているものの、経済合理性を重視する評価方法が多数だと言える。そのような中で、芸術祭の体験を通じた人々の変化など、長期的な視点で独自の評価軸を試みた本報告書は、我が国の文化政策面においても、評価のあり方の最前線を提示していると言っても過言ではないだろう。³⁸

38. ロジックモデルを用いた評価手法について紹介したのはおそらく国内では下記が初めてだろう。

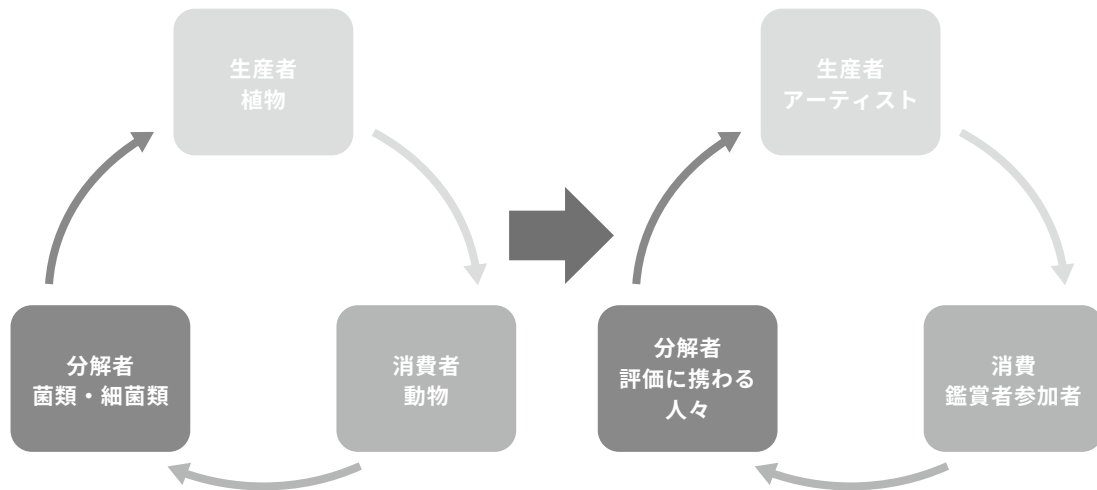
『文化庁委託調査 文化政策の評価手法に関する調査研究 報告書』株式会社ニッセイ基礎研究所、2012年
下記研究が公開された2010年時点ではまだロジックモデルへの言及はない。

吉本光宏『文化審議会第8期文化政策部会(第11回)文化政策の評価について』株式会社ニッセイ基礎研究所、2010年

5.1.2. 自然の生態系から学ぶ循環の仕組み

ここで、評価のあり方を見つめ直すために、自然界の生態系における「生産者・消費者・分解者」の役割を比喻として説明したい。生態学によると、光合成によって無機物から有機物を作り出す植物を「生産者」、生産者によって作り出された有機物を直接または間接的に取り込む動物を「消費者」とし、有機物を分解して無機物に変える菌類・細菌類のことを「分解者」と呼んでいる。この自然界の三者の役割を比喻として、「生産者」である植物を、表現活動を行うアーティストになぞらえ、「消費者」である動物は、表現を直接享受する鑑賞者や活動に関わった参加者になぞらえる。そして、「分解者」である菌類・細菌類を、事業評価に携わる関係者になぞらえてみたい。（【図表29】参照）

図表 29 自然の生態系になぞらえた文化の循環の仕組み



自然界における生産者と消費者との関係は理解しやすい。動物は植物を食べ、動物間での食物連鎖もイメージできるだろう。その一方で、菌類や細菌類といった分解者の役割は見えにくく、植物や動物によって生み出された有機物を、土の中で再び無機物に変化させている工程は、人間の目で確認しにくい。しかし、分解者の役割がなければ「生産→消費」の一方通行となり、植物は世代交代できず、動物はその場を離れる以外に生き残れない。土に落ちた植物の枯れた葉や朽ちた実、動物の排泄物や死体等の有機物を、土中にある分解者が無機物へと分解することで、次の植物の光合成によって有機物が生成される。そうした「生産→消費→分解→生産→…」という循環によって、その土地での生物環境が持続可能となっているのである。

文化事業において、「生産→消費」の一方通行になってしまうケースは往々にして見られる。著名なアーティストの美術展や公演が、立派な美術館や劇場・音楽堂で開催され、それを享受する鑑賞者や参加者が存在しても、その二者間で関係が完結してしまえば「一部の人だけのための文化」として市民から理解、共感、支持を得られない。アーティストと鑑賞者・参加者の関係によって、地域に何がもたらされているのかを「分解」する、つまり調査、分析、評価することで、市民からの理解、共感、支持を獲得する。それが、次の文化を生産するための豊かな土壌を育むことになるのである。

自然界の生態系と同じように、地域の文化環境も「分解」＝「調査、分析、評価」という工程を含めた循環の仕組みが必要なのである。

5.1.3. 基本方針「都市と自然」の持続可能性のための評価

基本構想の背景となった2009年3月の「札幌市文化芸術基本計画」では、その目指すところを以下のように述べている。

この基本計画の目指すところは、文化芸術活動による成果が次々と花ひらくように循環して生み出されていく「花ひらく創造都市」の実現であり、その中で、札幌のアートシーンが一層活発になる契機として「国際芸術展の開催に向けた検討」をすることとしています。

また、基本計画期間の5年を経た2015年の「札幌市文化芸術基本計画」の改定の中では、2012年度までに2期分の「札幌文化芸術円卓会議」が行われた活動報告から、以下のような発言が紹介されている。

今までの文化芸術施策は、一方通行でそれぞれの関連性が見えないため、コミュニティ(札幌市)の主体として文化的生活を営み、文化芸術の享受・支援者として機能する「市民(企業)」、新しい価値を創造し、コミュニティに提供し、文化芸術の発信者として機能する「アーティスト」、コミュニティの文化的な成長の指針を構築・維持し、文化芸術の環境整備者として機能する「行政」の3つの主体を明確化。これら3つの担い手を軸とした施策がスムーズに循環して、互いを補完し合うイメージをつくる必要がある。

以上のように、これまでの計画や事業の構想の中で「循環」というキーワードは既に繰り返し述べられており、その重要性は共通理解となっている。「花ひらくように循環」するためには、文化の「生産」と「消費」の繰り返しにしてはならず、コストパフォーマンスや経済合理性ではない見地から、そこに生まれた有機的な「モノ」や「コト」を丁寧に咀嚼して分解(=調査、分析、評価)し、さらに、分解することが地域文化の土壌の維持や更新をしていくことが必要なのである。

SIAFの基本方針「都市と自然」になぞらえれば、自然の生態系から都市のあり方を学び、都市におけるまちづくり、観光、経済の循環を持続可能とするためにも、芸術祭における評価の中長期の継続が求められている。

5.1.4. 評価の工程がビルド・インされた3年サイクルの循環

従来の公共政策の評価においてもPDCA(Plan, Do, Check, Action)という循環の考え方はよく知られている。しかし、単年度予算を前提とした事業の多くは、「Plan→Do」に比べて「Check→Action」にかかる時間と労力は圧倒的に少なく、結果として事業評価は「仕分け」的な活用にしか至っていない。また、単年度予算のフレームでは、事業の評価・改善が、翌年度の事業に反映されることは時系列的にビルド・インすることに無理が生じ、PDCAをスムーズに循環させることはそもそも困難である。(【図表30】参照)

図表 30 単年度事業におけるPDCAサイクル



事業の実施に比べて評価に投入する予算や労力が乏しく、
実施の時期によっては評価が翌年度事業の企画の改善に間に合わない。

しかし、SIAFは、その芸術祭本体事業は3年ごとで、事業実施後に2年間の準備期を取ることが、基本構想で示されている。この3年単位の循環は、PDCAサイクルの本来の効果を期待できる。すなわち、本体事業の実施と現場のモニタリングを行い、翌年度に事後の調査、分析、評価と企画の改善の検討に1年、企画の具体化と制作に1年、そして、次の本体事業の実施、という循環のビルド・インが可能であり、Plan→DoとCheck→Actionが対等なバランスで循環するのである。(【図表31】参照)

図表 31 3年間のPDCAサイクルのイメージ



「事業の実施」、「事後の調査、分析、評価」、「企画の具体化と制作」、
そして「事業の実施」...という3年単位での循環をビルド・インする。

この3年を1単位とするサイクルを基本に、評価作業を起点とした企画立案、制作実施のロードマップを定着させることが、初回の芸術祭を終えて、2回目以降の芸術祭に向けた現時点で求められている作業である。そして、3年1単位で繰り返されるサイクルの変化を芸術祭開始後10年、あるいは20年といった継続追跡をすることで、「花ひらく創造都市」が可視化されるのである。

5.2. 本年度の取り組みへの統括

本年度の評価への取り組みを統括するに当たって、「ロジックモデルの実践」「多様なステークホルダー(利害関係者)からの評価」「ステークホルダーの内面や関係性の可視化」「2017年に向けたロジックの構築準備」という4つの観点から統括したい。

5.2.1. ロジックモデルの実践

まず、本年度評価では、事業の目的と効果の間のストーリーを細分化し、論理的に体系化する「ロジックモデル」という評価手法を実践した(【2.1.】【2.2.】【図表3】参照)。そこでも示されているとおり、SIAF2014では、ロジックの構築が必ずしも計画段階で明確化・明文化されていなかったものの、スタッフに暗黙に共有されていたストーリーを明らかにすることで、芸術祭を特徴づけていたキーワードや、アクティビティ、アウトプット、インパクトといった来場者や市民社会の変化を文言化した。

こうした作業を踏まえたロジックモデルに沿って、事業実施後におけるSIAF関係者追跡アンケート調査(【2.3.】参照)、来場者に対する会場実施アンケートのクロス集計(【2.4.1.】参照)といったアンケート調査を設計、分析(あるいは再分析)を行った。その結果、企画制作段階の戦略・戦術面の「仮説」が検証され、次回以降の芸術祭でのマーケティングやパブリシティの手法の改善が期待される。

着目したい調査結果として、SIAFに関わることにより「アートを通じた交流が増えた」「アートを身近に感じるようになった」といった自分自身の何らかの変化を感じている人が7割程いたが、自身の変化の波及効果が周囲の人間関係に広がるといった変化は調査結果からはまだ見えてこなかった。この点については、初回の芸術祭のロジックモデル(【図表3】参照)で、アクティビティで期待していた「作品に触れる」ことが「観た人に変化」を及ぼすことには効果があったものの、「周囲が変化」という効果に至っていないことが把握できた。

こうした形でロジックモデルによる評価を実践することで、仮説と結果の一致、あるいは不一致を、次のプログラム内容、マーケティング、パブリシティに生かすと同時に、事業の目的(ミッション)や目標(ゴール)に近づくことが可能となる。さらには、仮説が固定化するのではなく、新しい仮説を生み出していくためにも、ロジックモデルによる評価を引き続き継続させることが必要である。

5.2.2. 多様なステークホルダーからの評価

本年度の評価では、芸術祭会期中の来場者へのアンケート調査以外に、芸術祭との多様な関わりを持つステークホルダーからの意見や反応を収集し、様々な立場からの多面的な評価を把握するように努めた。

事業実施後におけるSIAF関係者追跡アンケート調査(【2.3.】参照)では、芸術祭のプログラムの位置づけ(連携事業/自主事業)、プログラムの関わり方(参加者/スタッフ)、あるいは行政担当者等、異なる立場のステークホルダーを対象に共通の質問をした。

また、メディア掲載実績(【2.4.2.】参照)やアートファン(受け手)からの反応(【2.4.3.】参照)といった調査では、直接的な芸術祭の来場者や関係者とは異なる意外な結果が浮かび上がっている。作品の解釈や恒常設置が論争を呼び、紙面に多く掲載された島袋道浩の『一石を投じる』が、市民の要望によって継続設置が決まったことは、芸術祭を取り巻くメディアや市民との関わりを考える上で、象徴的な出来事となった。また、東京・代官山で実施されたSIAF2014ドキュメントの出版記念イベントで実施したアンケート調査では、熱心なアートツーリスト(アートファン)と想定される調査対象者の6割以上が芸術祭に参加していなかったこと等、来場者や関係

者だけを対象とした調査では見えてこない評価結果が得られた。

今後、継続的に事業評価を行うに当たっては、さらに別のステークホルダーへのアプローチが求められる。例えば、まちづくり、観光、経済といった分野にも、芸術祭のステークホルダーは存在する。芸術祭の新たなステークホルダーの開拓、協力・連携関係の構築により、市民との関係の多様性や持続可能性を担保される状況を形成したい。そのためにも、多様なステークホルダーからの評価に取り組むことが望まれる。

5.2.3. ステークホルダーの内面や関係性の可視化

本年度の評価が重視したのは、アウトプットの量(入場者数、参加者数、事業収入等)や質(感想、批評、満足度等)だけではなく、芸術祭に関わった人々の「内面」や「関係性」を把握することである。事業実施後におけるSIAF関係者追跡アンケート調査(【2.3】参照)では、「SIAFにかかわって、ご自身に以下の選択肢のような変化はありましたか」「SIAFにかかわって、周囲の人(家族、近所の人、同僚、友人等)に何か変化はありましたか」「SIAFにかかわって、これまでの人間関係とは異なる新しい関係ができましたか」といった、芸術祭が内面や関係性にどのような影響を与えたのかを分析しようとしている。また、関係者へのヒアリングでも、その立場や関わり方によって、様々な反応を知ることができ、量的評価ではない、質的評価の重要性を再認識した。

こうしたアプローチは、芸術祭を単なる「市場」と捉えた上で供給と需要のバランスが適正かどうか、あるいは芸術の受け手を単なる「消費者」と捉えた上でその欲求が満たされたかどうか、という観点だけではなく、その人の精神にどのような作用があり、人間関係にどのような影響があるのかを掘り下げようとしている。これは、社会や地域における人々の信頼関係や結びつきを表す「ソーシャルキャピタル(社会関係資本)」という概念の上に、芸術祭が果たした役割の分析を試みるもので、国や地方自治体が行う文化事業の評価の手法としては新しい試みであり、貴重なモデルケースだと言える。

個人の内面の変化が人と人との関係性を変化させ、地域に変化をもたらす。そこに、文化や芸術の役割があるのではないか、という大きな仮説の下に調査を行ったものだが、先述したように、本年度の調査結果からは、芸術祭を「観た人に変化」を及ぼしたとは言えるものの、その人を介して「周囲が変化」という効果は確認できなかった。しかし、こうした変化は、単発の経験から即時的に認識できるものではないことは容易に想像することができ、芸術祭が2回、3回と繰り返される中で、徐々に変化が広がっていくことが期待される。そのため、芸術祭における多様なステークホルダーの、常に変化していく内面や関係性の変化について、その割合の多寡だけでなく、推移の変化を動的に追跡することが重要である。

5.2.4. 2017年に向けたロジックの構築準備(提案)

近年、国内各地で増大するビエンナーレやトリエンナーレといった国際芸術祭、地域密着型のアートプロジェクトやアートイベントに対する批判的な意見が聞かれるようになった。そうした意見には、「イベントの供給過多に陥っている」「目的や意義が見えにくい」「芸術が地域振興の手段になっている」といった論点が共通していると言えるだろう。

そうした中で、文化庁は2015年7月に「文化プログラムの実施に向けた文化庁の基本構想～ 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とした文化芸術立国の実現のために～」で、平成32年(2020年)までに訪日外国人旅行者数を2,000万人、イベント数20万件、参加アーティスト数5万人、参加人数5,000万人という数値目標を発表した。

一方では芸術祭に対する批判的な意見が起きはじめており、他方では国を挙げて文化イベントの増加に向けた取り組みが始まっている。芸術祭を企画・主催する立場の人々と、芸術そのものに関心の薄い人々との間に温度差が生じる中で、公共政策としての芸術祭のあり方が問われている。そうした動きを背景に、SIAFで限られた芸術家と愛好家が「生産→消費」を繰り返しては、幅広い市民の理解、共感、支持を得ることはできないだろう。今まで以上に芸術祭の目的や意義を明確にし、過去の実績を評価・検証するだけでなく、他の文化イベントとの差別化を図りながら、今後の方針や見通しを立てて丁寧に説明することが、SIAFを持続する上では必要不可欠となっている。

そうしたニーズに応えるべく、本年度の評価は、基本構想で示されている芸術祭の目的や期待される効果に向けた「ストーリー」と「ロジック」を構築し始めている。「ストーリー」は3年ごとにゲストディレクターとともに作られるものだとすれば、「ロジック」は、過去のストーリーを一旦分解し、次のストーリーを再構築する際に下支えとなる理論にほかならない。ただし、SIAFに求められるロジックとは、次の芸術祭に向けた暫定的な指針や戦略のための、更新可能なものでなければならない。なぜならば、現代アートという同時代の先端的な表現を扱う以上、予測困難な社会の変化と呼応する作品や表現活動の受け皿となる地域の土壌には、ロジックそのものに柔軟性や可変性が内在しておく必要があるからだ。

本報告書が、2017年に向けたロジックの構築のための大きな一歩となることを、心から祈念したい。

参考：事業評価体制について

[全体監修 / 調査設計]

光岡寿郎 (東京経済大学コミュニケーション学部専任講師)

日本学術振興会特別研究員、早稲田大学演劇博物館グローバルCOE助手を経て現職。専門はメディア研究、芸術文化の社会学。今プロジェクトに関連する仕事として、「国際展〈論〉のポリティクス」(2012年、『芸術と環境』所収)がある。

→ 4.2.、4.3. 監修、調査設計、会場アンケート分析監修、アンケート再構築アドバイス

大澤寅雄 (ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室／文化生態観察)

ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室准主任研究員、九州大学ソーシャルアートラボ・アドバイザー、NPO法人アートNPOリンク事務局、NPO法人STスポット横浜監事。慶應義塾大学卒業後、劇場コンサルタントとして公共ホール・劇場の管理運営計画や開館準備業務に携わる。2003年文化庁新進芸術家海外留学制度により、アメリカ・シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。帰国後、NPO法人STスポット横浜の理事及び事務局長、東京大学文化資源学公開講座「市民社会再生」運営委員を経て現職。共著『これからのアートマネジメント“ソーシャル・シェア”への道』『文化からの復興 市民と震災といわきアリオスと』。

→ 5. 執筆 全体監修

吉澤弥生 (共立女子大学文芸学部准教授)

NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト [recip] 理事／NPO法人アートNPOリンク理事

大阪大学大学院修了、博士(人間科学)。専門は芸術社会学。労働、政策、運動、地域の視座から現代芸術を研究。近著に論文「大阪の現代芸術事業の周辺で起きたこと」(『上方芸能』191号、2014)、単著『芸術は社会を変えるか? 一文化生産の社会学からの接近』(青弓社、2011)、調査報告書『続々・若い芸術家たちの労働』(2014)等。また recip では東京文化発信プロジェクト室との協働で『「船は種」に関する活動記録と検証報告』(2013)、『「筋平の事例研究」活動記録と検証報告』(2014)を制作。

→ 2.2. 監修、2.3. SIAF 関係者調査アンケート原案作成

[コーディネーター / 執筆 / データ分析作業]

熊谷薫 (デジタルアーカイブ・コーディネーター / アートマネージャー)

2012年11月から東京文化発信プロジェクト室東京アートポイント計画のプログラムオフィサーとして人材育成講座 TARKL において、記録調査 / アーカイブ / 評価に関わる研究開発プログラムに携わった。2014年4月よりフリーランスになりデジタルアーカイブ・コーディネーターとして東京アートポイント計画共催団体の複数プロジェクトや、五十嵐靖晃のくすかきプロジェクト、ヨコハマ・パラトリエンナーレ2014ヘシステムを導入。2015年は札幌国際芸術祭や群馬大学×アーツ前橋のアートマネジメント講座での事業評価のコーディネーターを務める。

→ 0.、1.2.、2.2.、2.4.、3.2.、3.3.、4.1.、4.2.、4.3.、4.4.、執筆

永井希依彦 (デロイトトーマツコンサルティング合同会社 マネージャー)

各種経営コンサルティング及び産業界への提言活動に従事。専門はソーシャルキャピタル、組織ガバナンス、及び組織戦略策定。今プロジェクトに関する仕事として「アートプロジェクト実施プロセスの再考」(2012年、種は船アーカイブ連続研究会)がある。種子島宇宙芸術祭委嘱アドバイザー。

→ 1.1.、1.2.、1.3.、2.1.、2.3. 執筆

アシスタント：

海老澤彩(リサーチャー)

2013年多摩美術大学大学院修了。2011年よりAOBA+ART(横浜市)の中心メンバーとして各プロジェクトの企画及びキュレーションに携わる。一方で、東京アートポイント計画のリサーチャーとしてアートプロジェクトのアーカイブについてリサーチを担当。

→3.1.執筆

[SIAF関係者の追跡調査]

・ヒアリング・インタビュー調査：

大友恵理(キュレーター、SIAF2014プロジェクトアシスタント)

・アンケート調査：

石島耕平(北海道大学大学院社会教育学 修士課程)

・検証用データ作成：

片寄菜々美(北海道教育大学岩見沢校 芸術・スポーツビジネス専攻)

宮澤樹乃(北海道教育大学岩見沢校 芸術・スポーツビジネス専攻)

・本調査及びデータ作成に関するアドバイス：

加藤康子(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程)

金野祐介(一般社団法人A-bank 北海道 事務局)

・追跡調査作業コーディネート及びリポート作成：

小田井真美(SIAF2014チーフ・プロジェクトマネージャー)